

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

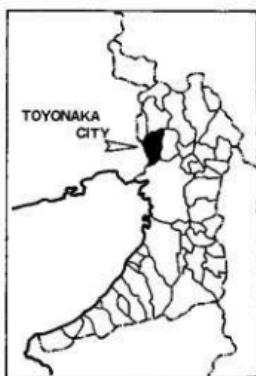
1984年度

1985年3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1984年度



1985年3月

豊中市教育委員会

序 文

豊中市は、大阪府の北西部に位置し、大阪のベッドタウンとして、戦後、急速に成長してきた町であります。

本市は綾なす千里丘陵と猪名川によって育まれた沃野にあり、安定した生産基盤と自然に恵まれて栄えた悠久の地であります。

しかし、近年にみる開発はとどまるところなく、一層激しく、土地を、景観を、変貌させています。

開発と保護、これは古くて新しい問題であります。私達は先人の文化遺産を謙虚に受けとめ、十分に認識し、現代の社会に活かしていくかなければなりません。

この報告書は、以上のようなことを踏まえ、危機に直面している遺跡について、国並びに大阪府の援助を受けて実施した調査の概要報告であります。今回の調査においては多大な成果を得ており、このような作業を繰返すことにより、先人のくらしおぶりが明らかにされ、現代社会に活かされる日がくることを確信しています。

なお、調査にあたっては、多くの御指導をいただいた諸先生をはじめ、土地所有者の方々には文化財の重要性を御理解いただき、積極的に御協力いただきました。また文化庁、大阪府教育委員会並びに関係機関には格別の御指導と御協力をいただきました。こうした関係各位からの御協力に支えられて、文化財行政がより一層押し進められることに対し、関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。

昭和60年3月31日

豊中市教育委員会

教育長 湯元英世

例 言

1. 本書は、豊中市教育委員会が昭和59年度国庫補助事業（総額 3,000,000円、国庫50%、府費 25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。
2. 本年度の調査は、柴原遺跡、島田遺跡、蟹池北遺跡、新免遺跡、山ノ上遺跡について実施した。調査は昭和59年6月26日～昭和60年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を行なった。
3. 本書は、調査担当者を中心に全員が作成し、各報告の目次あるいは例言にその文責を明らかにした。全体の編集は服部聰志・田上雅則の協力を得、柳本照男が担当し、遺物写真撮影は園田克也が行なった。
- 整理作業は、調査担当者ならびに厚美正子の指導のもとで、須藤聖子・酒井泰子・土江伸明・奥野豊子・佐田千穂（関西大学）、戸田千恵（大谷大学）、今井直美・熊田真子（大手前女子大学）の協力を得た。
4. 調査の進行にあたって、豊中市文化財保護委員藤沢一夫氏・都出比呂志氏より御指導、御助言をいただいた事に対して深く感謝いたします。
5. 各調査地の土地所有者の方々には、文化財保護ならびに調査に対して深く御理解をいただいた事について、各報告の例言に明記するとともに、深謝いたします。
6. なお、各調査地点位置図の縮尺は5000分の1に統一した。

目 次

I.	柴原遺跡	1
II.	山ノ上遺跡	39
III.	島田遺跡	57
IV.	新免遺跡	69
V.	蟹池北遺跡	75

遺跡名	調査地	調査面積 m ²	調査担当者	調査期間
I 5 柴原遺跡	柴原町1丁目14-1番地 他	604m ²	服部聰志	昭和59年6月26日～同年8月10日
II 14 山ノ上遺跡	宝山町78-6番地	154m ²	柳本照男	昭和60年1月14日～同年1月31日
III 38 島田遺跡	庄内柴町2丁目29-2番地 他	80m ²	柳本照男	昭和59年7月13日～同年7月27日
IV 13 新免遺跡	玉井町3丁目85番地 他	84m ²	柳本照男	昭和59年12月12日～同年12月22日
V 2 蟹池北遺跡	蟹池北町1丁目133-1番地 他	56m ²	柳本照男	昭和59年10月23日～同年10月27日

※遺跡名の番号は周辺遺跡分布図と対応する。



- | | | | |
|-----------|-----------------|--------------|-----------|
| 1. 御兼山古墳 | 2. 龍池北古墳(宮の前遺跡) | 3. 貴比東遺跡 | 4. 御兼山遺跡 |
| 5. 藤原遺跡 | 6. 桜井谷古窯跡群 | 7. 貴池西遺跡 | 8. 南刀根山遺跡 |
| 9. 本町道路 | 10. 新免宮山古墳群 | 11. 金寺山免寺跡 | 12. 畠塚遺跡 |
| 13. 新免遺跡 | 14. 山ノ上遺跡 | 15. 桜塚古墳群 | 16. 長興寺遺跡 |
| 17. 猪名寺跡 | 18. 口酒井遺跡 | 19. 田能遺跡 | 20. 原田西遺跡 |
| 21. 駒部遺跡 | 22. 原田遺跡 | 23. 曾根遺跡 | 24. 梅塚古墳 |
| 23. 城山遺跡 | 26. 服部遺跡 | 27. 稔積遺跡 | 28. 小曾根遺跡 |
| 29. 北条遺跡 | 30. 椿原の前遺跡 | 31. 利倉遺跡 | 32. 利倉西遺跡 |
| 33. 上津島遺跡 | 34. 上津島南遺跡 | 35. 稔積ボンブ場遺跡 | 36. 若王寺跡 |
| 37. 善法寺道路 | 38. 鳥山遺跡 | 39. 庄内遺跡 | 40. 鳥江遺跡 |
| 41. 下牧部遺跡 | 42. 鮎川古窯 | | |

柴原遺跡発掘調査概要報告

例 言

1. 本書は、豊中市柴原町1丁目14-1他において実施した、マンション建設工事に先立つ事前発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、昭和59年6月26日から同年8月10日にかけて実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育部社会教育課文化係が実施し、服部聰志が現地を担当した。調査に当たっては補助員として、山元健、清水篤、酒井泰子（関西大学）、岡林孝作（筑波大学）、竹谷俊彦、清水敏彦、岡田克也、牧野暁、水野豊が参加し、また、厚美正子、田上雅則（本市教育委員会文化財担当嘱託）、岡村勝行（大阪大学）、米田文孝、前田庄久、谷川京子（関西大学）の協力を得た。
4. 本書を作成するに当たっては、橋本正幸（本市教育委員会文化財担当嘱託）、厚美、田上、清水篤、岡林、酒井が、構造および出土遺物の一部を分担執筆し、その他を服部が担当し、文責は末尾に記した。編集は柳本、服部が行なった。
5. なお調査の進行に当たっては、藤沢一夫（四天王寺国際佛教大学教授）、都出比呂志（大阪大学助教授）、富田好久（青山女子短期大学専任講師）、堀江門也（大阪府教育委員会文化財保護課係長）、中井貞夫、尾上実（大阪府教育委員会文化財保護課）の各氏より、現地指導、その他の種々の点で御教示、御協力をいただいた。また土地所有者中井芳太郎氏には、調査の実施に際し、深甚なる御理解をいただけたことを記し、上記各位に対し、深く感謝の意を表する次第である。

目 次

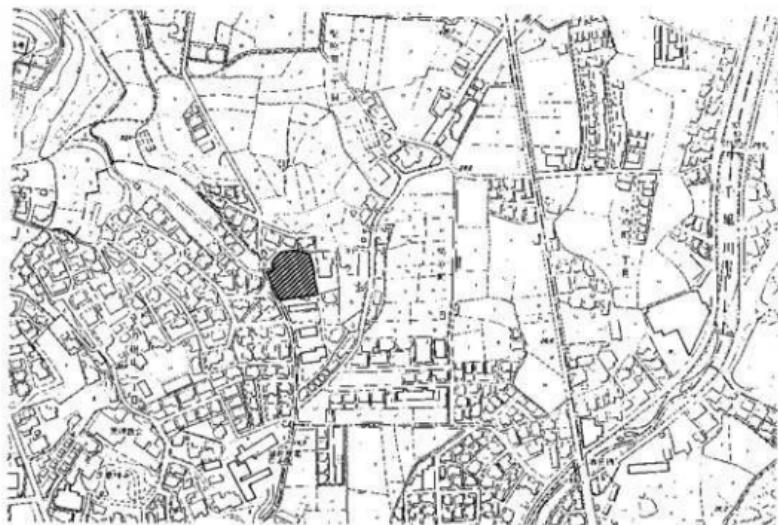
I. 調査に至る経過	3
II. 位置と環境	4
III. 調査結果	5
1. 調査方法	5
2. 基本層序と微地形	5
3. 遺構と遺物	6
(1) 旧石器、縄文時代	6
(2) 弥生時代	10
(3) 古墳時代	10
(4) 奈良時代	22
IV. まとめ	28

I. 調査に至る経過

1984年3月、土地所有者ならびに建設業者より農中市に対し、当調査地点におけるマンション建築の確認申請が提出された。市教育委員会としては、それまで当地点に対し遺跡包蔵地としての登録を行なっていなかったが、遺跡の存在が一応予想されたので、とりあえず立会調査を実施することとした。その結果、丘陵斜面にもかかわらず、各地点で遺物包含層の存在を確認し、特に斜面低位においては約50cmもの厚い堆積を認めるに至った。

ただ丘陵斜面ということもあり、遺構の保存状態についても懸念がもたれたので、一旦試掘調査を実施し、その結果をふまえその後の対応を協議することとなった。

以上のような経過のもとに、同年4月2日より21日の16日間、試掘調査を実施した結果、最も遺存状況の良好な個所については約4面の遺構面を確認し、古墳時代を中心として、一部弥生時代にさかのほる遺跡であることが判明した。そこで市教委としては、施主側との協議の結果、同年6月26日より8月10日まで約1ヶ月半の日程を得、本調査を実施するはこびとなつたのである。本調査の成果については以下に記すごとくである。



第1図 調査地点位置図

II. 位置と環境

柴原遺跡は、豊中市柴原町1丁目14付近に所在し、現在の阪急豊中駅より北方へ約1kmの地点に位置する。鉄道の敷設以来、遺跡周辺もまた宅地開発の波を被り、一帯は閑静な住宅地帯となっているが、その中にかろうじて取り残されていた1,000m²余りの畠地が今回の調査対象地点である。

明治41年発行の地形図を見ると、柴原遺跡の所在する通称豊中台地は千里丘陵の西端を占め、市域東部を南流する天王川により東域を隔たる。そして北摂山地南端部を東西に貫通する箕面街道を北限とし、南北5km、東西2.2kmの比較的なだらかな丘陵地形をなしていた。この台地の西辺および南辺は、縄文前期の伊丹海進による段丘崖が発達し、とくに台地南端の曾根付近は現在でも急な斜面が東西に続いている。

この台地を二分するかのごとく、北摂山地に源を発する千里川が、北東から南西に向けて流れ、箕輪付近にて平野部に至り、流路を両方にかえて利倉付近で猪名川と合流している。

この河川上流域には、桜井谷と通称される狭小な谷地形が発達し、遺跡はこの北岸に形成された低位段丘面に立地している。段丘端部には浸食による幾筋もの尾根が千里川に向けて伸びてこの尾根の頂部、標高32m前後を測る優れて眺望のよい緩斜面上を占めている。また南西を流れる千里川とは直線距離にして、わずかに300mという好地形でもある。

さて柴原遺跡をとりまく歴史的環境について簡単に触れておくと、まず古くは董池西遺跡、大塚古墳墓址埋土より出土した國府型ナイフ形石器が旧石器時代後期に比定され、当市における最初の人類の足跡を証している。ついで縄文時代の遺跡として中津式、福田K2式を主体とした上器群に示されるごとく千里川上流域の野畠遺跡が後期を代表する遺跡としてあげることができる。また当遺跡や山ノ上遺跡等晩期の土器を出土する遺跡が、いずれも千里川流域に集中する。弥生時代になると、丘陵部の遺跡は西南部の沖積地とは比べべくもないが、それでも近年大阪大学文学部国史研究室により調査された待兼山遺跡は、当市における高地性集落の存在を明らかにした。また台地西部の新免遺跡、山ノ上遺跡等も中～後期に比定される遺跡である。やがて古墳時代になると前、中期には台地南部に桜塚古墳群と称する畿内有数の古墳群が形成され、西方には同時期に属する弥生時代以来の山ノ上遺跡が所在する。しかし、丘陵部に立地する該期の集落遺跡についてはなお不明な点が多い。その後、後期以降、遺跡の数は以前に比して増加拡大し、丘陵部の開発が急速に進められたことを物語っている。豊中市駅東方の本町遺跡では、掘立柱建物跡とともに大小の溝から多量の須恵器が出土し、西方に隣接する新免遺跡でも、同様に須恵器の出土が顕著に認められる。一方これらの須恵器を焼いた窯場が、台地北部の、とくに千里川を臨む丘陵斜面に数多く営まれ、桜井谷古窯跡群としてついに学界で知られるところである。

III. 調査結果

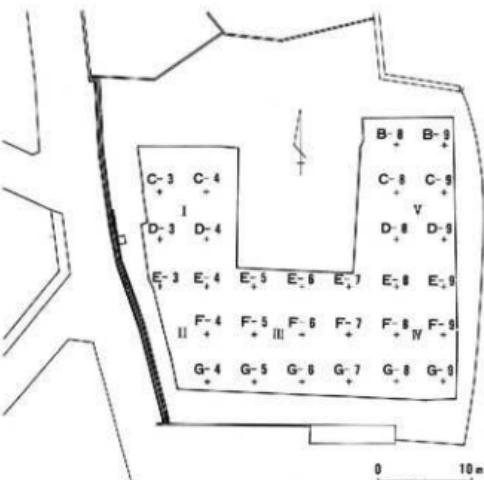
1. 調査方法

まず調査地区の設定について簡単に触れておこう。今回は調査区の南北主軸線を磁北にとり、これを基準に一辺5.0mの方正地区割りを行なった。そして調査区全域を包括する形で、南北ラインを西からアラビア数字で、東西ラインを北からアルファベットで表示し、各交点のポイント名称はA-1・2・3のようにあらわした。また各地区的名称は東北枕の名称に従うこととした。

さて、調査方法は盛土、旧耕土(第1層)、床土(第2層)を重機により掘削し、第3層以下を手作業により順次掘削を行なった。その際、東西方向ではEラインに、南北方向では5ラインの西2.0mにそれぞれ幅50cmの帯を残し、土層観察に備えることとした。よって以下では記述の都合上、調査区西側のEラインより北側をI区、その南側をII区、以下III・IV・V区と呼称することがある(第2図)。

2. 基本層序と微地形

今回の調査地点の基本層序は、大きく6層に区分される(第3図)。このうち第1・2層は近年までの耕作に係る土壤であり、第3層から第5層までが遺物包含層である。第6層は基本的には地山が二次的に移動、流出した土で、ほとんど遺物を含まない点から、当地点が生活空間として利用されるより以前の、自然の堆積層と考えられる。また第7層の地山は農中台地を形成する大阪層群上部に相当するが、調査区内各地点によって土質を異にし、大きくみて5ライン以東は2~5cm大の礫石を多量に含む礫層、それより西側は黄色粘土を主体とした粘土層が厚く堆積している。おそらく緩斜面という当地点の



第2図 調査範囲図



第3図 土層断面写真

地形から判断すると、粘土層、礫層が互層をなす大阪層群を斜めにスライスした状況を示すものであろう。

以上の基本層序の中で、遺構面として理解されるのは第3・4・5・6層の各上面であり、第3・4層が奈良時代、第5層が古墳時代後期、第6層が縄文～古墳時代後期にそれぞれ相当する。ただし調査区西北部のI区、東北部のV区は基本的に第4・5層の堆積は認められず、床上および、第3層の薄い堆積の下は即地山であったため、各時代の遺構を全て層位的に把握することは不可能であった。

さて当調査区は、全体として北東から南西に向けて緩い傾斜を示し、第6層上面での傾斜角度は仰角で約3.2度を測る。ただし7ラインに沿って耕作に伴う大きな溝状の擾乱があり、調査区を大きく東西に二分する結果となっている。ついで調査区東端の断面では、北部および南部においてほぼ同一レベルを示し、その間のE・Fライン付近にて約40cmの深さで凹状に落ち込んでいる。この落ち込みはほぼ5ライン付近までつづき、東西方向のやや小さな谷状ともいべき地形を呈しているが、これを埋める形で地山から遊離した礫石が移動、堆積し、第6層が形成されたと考えるべきである。したがって第6層上面もまた、E・Fライン付近にて浅い凹みを残し、第5層が形成された時点をもって、全体にフラットな地形を呈するに至ったものと考えられる。

3. 遺構と遺物

今回検出した遺構は縄文(?)～奈良時代の各期に亘り、本来各時代の遺構を層位的に図示すべきであるが、先述のごとく各地区において層序が一定していないため、今回は検出遺構の全てを一枚の図面に収めた(第4図)。特にI・V区は床上ないし第3層直下の地山上面にて検出しているので、所属時期については必ずしも明らかではない。詳細については本報告に委ね、ここでは各期の主要な遺構・遺物についてのみ報告することとする。

(1) 旧石器・縄文時代

今回の調査において、わずかながらも旧石器～縄文時代の遺物が出土している。それらは国府型ナイフ形石器1、翼状剥片1、石錐7、石錐2、縄文土器片数点である。このうち石錐、石錐については一部弥生時代のものも含まれるが、区別し難いものもあり、煩雑を避けるため、ここで一括報告する。

国府型ナイフ形石器(第5図1、図版5-1)は、SK702(E-6区)の掘り方底部付近にて、一部第6層中にくいくこむようにして出土した。出土状況から見る限り、SK702の埋土中ないし、第6層中の遺物と判断され、調査時の所見からすれば、後者の可能性が強いと考えている。ただし時間的な余裕がなく地山の二次的移動層である第6層の精査をなし得なかったので、この点については明言を控えておく。また一方の翼状剥片についてもE-6区第5層中に含まれ、明らかにプライマリーな位置から遊離しており資料的制約を伴っている。ここでは国



第4図 造構全体図

府型ナイフ形石器についてのみ報告する。

(服部)

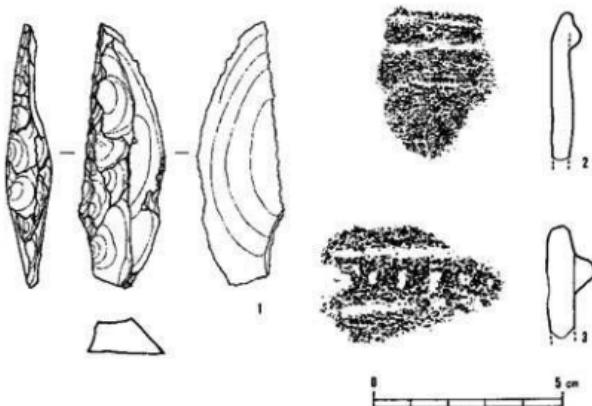
用材にはサスカイトを使用し、器面は転磨の形跡を見ず、風化もさほど進行していない。色調は暗灰色を呈する。後上打撃による済戸内技法第2工程段階に生産されたファースト・フレイクを素材としている。ポジティヴ面の一側面部から急角度の細部調整剝離を加えて、打面部を除去する。片面の背面中央にネガティヴな剝離面が認められ、ポジティヴな刃縁部には不規則な微細剝離痕が残る。最大長71.7mm、最大幅23.5mm、厚さ11.4mm、先端角度55度、刃縁部角度35度。(橋本)

縄文土器(第5図2・3、図版5-2・3)時に挙げた2点は、いずれも明確な遺構に作らうのではない。3はS P5067(F-5区)の埋土最上部に、2はF-6区第4層中に混入していた。ただし第7層上面検出のS K705(D-5区)、第6層上面検出のS K504(F-4区)等の不定形土块は、埋土(暗黒褐色粘質土)にはほとんど遺物を含まず、他の占墳~奈良時代の遺構とは状況が異なり、該期に属する可能性を残す。

2は深鉢の口縁部破片と見られるが、全体に風化が著しく内外面の調整については不明である。おそらく口縁端部と見なされる部位よりも0.3cm下に幅0.6cm、突出度0.3cmのやや貧弱な突帯が貼付されている。突帯には刻目は施されず、断面は三角形を呈する。胎土には2~3mmの大の多量のカクセン石、2mm以下の長石少量化が含まれ、茶褐色の色調を呈する。生駒西麓産のものであろう。

3も深鉢の口縁部破片であろう。2と同様、全体に風化が著しく、端部の残りも悪い。口縁端部より0.8cm下に刻目を有する突帯が貼付されている。突帯の幅1cm、突出度0.5cmで、断面はやや頂部の丸い三角形を呈する。この頂部に切れ込みの浅いV字の刻目が、0.7~0.9cm間隔で施されている。

内外の調整については風化のため不明。胎土は所謂生駒西麓産と見られ、1~2mmのカクセン石が最も多く、ついで1mm以下の金雲母片、3mm以下の長石、1mm前後の石英少量がつく。色調は全体に茶褐色を呈している。



第5図 旧石器・縄文土器実測図

石錐・石錐(図版5-4~12)9点を数え、いずれも包含層ないし遺構埋土から出土した。用材はすべてサヌカイトである。明らかに石錐と分かるものは基部の形状から平基式1、凹基式4、凸基式1、不明1に分類される。4・5・9は極めてシンメトリーに成形され、端部には微細な調整刺離が施される。対して6・10~12は、成形、調整とともに丁寧さに欠け、特に11・12は未完成品の可能性もある。また7・8については、使用に伴う刃潰れもなく明確な根拠に欠けるが、一応錐を見ておく。いずれも先端部の断面は部厚いシングル状を呈する。

(2) 弥生時代

該期の遺構として、今までのところSK703(E-6区)を挙げるにすぎないが、同じ田区の第6層上面において、ピット・不定形土塙等多数を検出しているので、今後の整理作業の結果次第では、該期の遺構をさらにある程度明らかにできると思われる。この点については第4・5層中にて、弥生中~後期に比定される土器片、石器類が出土していることからも裏付けられる。

SK703 南北1m以上、東西2.6m、深さ約30cmの不定形土塙である。第6層をベースとし、中央部をSK501により切られている。埋土にはほぼ一様に暗黒褐色粘質土が溜り、完形の高杯以外はほとんど無遺物の状態であった。高杯は土塙東側の最上層にて杯部を上に、脚部を下にして折り重なるように出土した。出土シベルは土塙底部より約20cm上にあり、遺構埋没後間もない時点に置かれたか、あるいは廃棄されたものと考えられる。

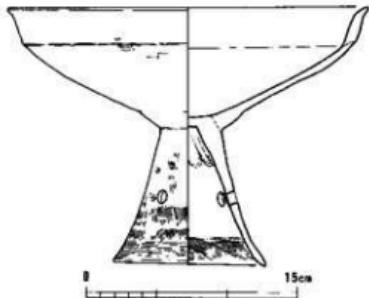
(服部)

高杯(第6図、図版5-13) 器高18.2cm、杯部口径25.2cmを測る。杯部はゆるやかにのび、明瞭な段をもって外反する口縁部をもつ。脚部はラッパ状に広がり、中程に円形のスカシを5方向に穿つ。杯部と脚部の接合は、完成した脚部に杯部を付加するもので、乾燥の時間的差異のため、出土時には接合部から折損していた。調整は杯部外面、脚部内外面ともハケメ、口縁部はヨコナダを行ない、脚部内面に一部絞り痕が認められる。弥生時代後期前葉に比定されよう。

(田上)

(3) 古墳時代

古墳時代の遺構として、掘立柱建物跡2・竪穴式住居跡1・大型土塙1・溝6・その他多数のピットがある。これらの大半は後期に属し、層位的には第5・6層、および第5・6層の堆積が認められない1区では第7層の各上面において検出したものである。しかし第4・5層内で、所謂布留式に比定される土器片が数点出土していることから見ると、当箇所地點ないし周辺部において、前中期に遡る遺構の存在も予想される。



第6図 弥生土器実測図

またSK502の埋土直下で検出したいた式住居跡(SB701)も、明らかにSK502より以前に営まれたものと判断され、占墳時代に至ってもなお数次に亘る生活面が存在したことが窺われる。各遺構の詳細については本報告に譲ることとし、ここでは主要な遺構についてのみ報告する。

遺構

SB701 E-4区のSK502の埋土直下において検出したいた式住居跡である。隅丸方形の平面プランを呈するが、遺構の大半は調査区外にのびるため規模については不明。周溝の幅10~20cm、床面からの深さ7~10cm、周壁の遺存高15cm前後を測る。調査範囲内には柱穴を確認できなかった。埋土遺物として土師器の小片を挙げるのみである。(第7図、図版1-1)

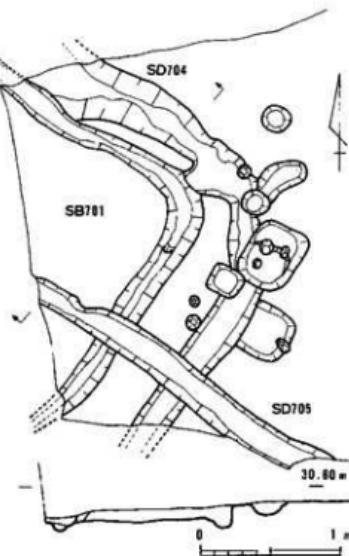
また周壁の外側に、住居跡の輪郭に沿ってはしるさらに1本の溝(SD704)を検出した。幅24~38cm、深さ6~17cmで、北側に向って深くなり、一部住居跡の周壁と重複している。周囲にはこれと切り合う大小のビット約9基を検出したが、住居跡との関係については不明である。

ただし直径10cm未溝のものについては支柱の可能性も考えられる。なおSD705は重複関係から明らかに住居跡よりも後出のもので、E-4区検出の溝とつながる可能性が高い。

SB702 C-4区付近にて検出した梁行2間(約2.7m)、桁行3間(約4.4m)の掘立柱建物である。柱穴は西側の1個のみ方形の他は、円ないし隋円形を呈し、規模は35~50cmとやや不揃いである。また深度も10~40cmとばらつきがあるが、底部レベルはほぼ一定している。建物中央部の2柱穴の存在から、あるいは總柱の建物になる可能性も残している。主軸方位はほぼ南北に近い。(第8図)

SB501 F-5区にて検出した、梁行2間(約3.6m)、桁行3間(約5.3m)の掘立柱建物である。柱間の距離は一定せず、桁行中央の2柱穴間に他に比べやや狭い。柱穴は円ないし隋円形を呈し直径45~65cm、深さ35~45cm。柱底は北側柱穴列の西2柱穴で確認し、いずれも直径10cm内外を測る。このうち西北コーナーの柱穴では、先細りの柱底が約8cmの深さで地山にくい込んでいた。埋土は一様に黒灰色粘土が溜り、出土遺物として須恵器・土師器の小片を挙げにとどまる。

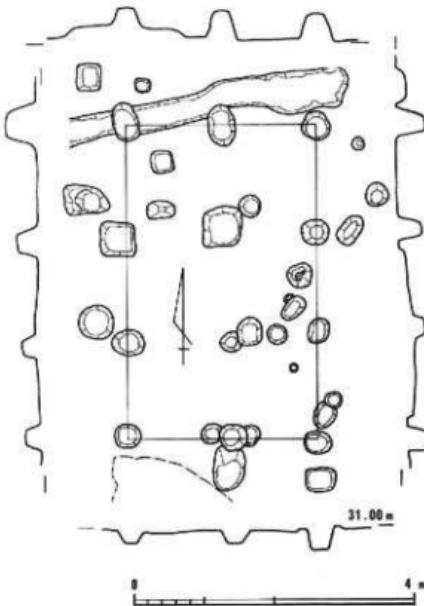
SK502 E-4・5区にて検出した南北1.8m、東西3.8m以上の大型土塙である。深さ35



第7図 SB701平面図

cm前後で、肩部は急角度で落ち込み、底部はほぼ平坦である。検出面は第5層の中位におさえられる。埋土は大きく3層に分かれ、各層にて多量の須恵器の混入が認められたが、底部上面および最下層上面にて特にまとまって出土した。器種は杯・鉢・壺・甕等多種類に及び、そのうち大型の甕などはいずれも破片となって散在し、杯身・杯蓋の一部は完形品も認められた。最下層上面にて焼土・炭の薄い堆積が見られたことから、一部で火の使用が窺われる。

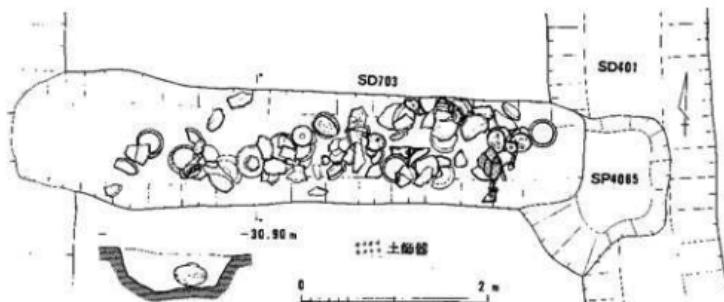
F-6・G-6区須恵器群 調査区南端のF-6・G-6区において、第5層上面のほぼフラットな面上に接する形で杯身・杯蓋を主体とした完形に近い須恵器が約15個体出土した。多少の移動は認められるものの、出土レベルはほぼ一定し、包含層中の混入遺物とはみなし難い状況を呈していた。中には身と蓋を合わせたもの、両者が密接し、明らかにセットをなすと思われるものも存在するところから、ある時期、意図的に設置、あるいは放棄されたとみなされるべきであろう。ただ、これらを包括する掘り方等の痕跡は検出できなかったので、当地点においては第5層上面そのものに意味を持たせるべきであろう。これを裏付けるかのように、当地点に限ってのみ第5層上面に厚さ5cm程度の暗黄灰色砂質土の薄い堆積が認められ、焼土を思わせる若干の赤褐色粘土粒の分布も確認している。この暗黄灰色砂質土直



第8図 SB702平面図



第9図 F-6・G-6区須恵器出土状態



第10図 SD703平面図 (D-3 + 4区)

下、すなわち第5層上面にて検出した遺構としてピット11、落ち込み4を挙げるが、規則的な配列も認められず、建物等の存在を明らかにすることはできなかった。ただ跡際にて検出したピットのうち1つには直径10cm前後の柱の痕跡を確認できたので、ピットのうちのいくつかは柱穴と見て差し支えなかろう。いずれにせよこれら須恵器群、ならびに遺構の一部はさらに南側の調査区外にのびることは容易に推察され、当地点における掘立柱建物等の存在とそれに伴う須恵器群という関係についても1つの可能性として挙げておきたい。(第9図)

SD703 D-Eライン間に検出した東西方向の溝である。調査の時点では、上部の削平をある程度考慮に入れ、底部レベルの不規則な溝が中央で途切れた状況を想定し、一応同一の遺構と判断した。しかし、溝の規模、形状にはかなりの差異が認められたので、本来別遺構である可能性も残している。西側のD-3・4区では、幅約60cm、深さ約25cmを測り、断面は底部のやや丸い逆台形を呈する。この中から、個体数にして約30個の須恵器および少量の土師器が出土した。その間は一様に暗灰色ないし茶灰色粘質土が溜っていた。須恵器の大半は溝下半部に含まれ、溝底に密着したものも相当数含まれていた。須恵器では完形に近いものが目立つが、いずれも何らかの損傷を被っており、中でもヒビ割れ、焼け痕みの状態を示すものの存在が注目される。(第10図、図版3-1)

一方、D-5・6・7区では、半ばないしそれ以上が調査区外にのびるため、正確な規模は明らかにし難い。しかし調査範囲内の様相から推すと、少なくとも幅1m以上、深さ40cm前後の規模が想定される。溝内にはやや密度にばらつきがあるものの、杯を主体とした須恵器が大量に出土し、うち一部は明らかに重ねられた状態を示していた。

(服部)

出土遺物

古式土師器 (第11図1~4)

いずれも包含層及び遺構埋土から出土したもので、細片化し摩滅も著しく、図化し得たものはここに挙げたものだけである。

小型丸底壺(1) 圖上では完形に復元できたが、口縁部・屈曲部が歪んでいるため口径

に不安が残る。さらに大きくなる可能性もある。全体に摩滅が著しく調整不明であるが、底部付近に一部ハケメが観察される。油壺の小型丸底壺に比して胎土が粗く水滲された粘土ではない。

小型器台（2）受部から脚部の一部まで残存している。受部は内向

気味に伸び、口縁端部は真直ぐ終わっている。脚部は大部分欠損しているが、恐らく直線的に広がるものと思われる。受部内面中央に径1cmの貫通孔が存在する。調整は内外面とも丁寧なヘラミガキである。

小型有段鉢（3）小型有段鉢の中でも小型の部類に属する。口縁部の外面の稜はあまり、全体的にやや鈍い感じを受ける。調整は口縁部ヨコナデで、それ以外は摩滅のため不明である。

高杯（4）体部からやや鋭い段をもって口縁部に移行する杯部を有する。口縁端部及び脚部は欠落している。調整は内外面とも細かいハケメ及びナデである。

なお、岡化できなかったが、上述した以外に甕の口縁部も若干出土している。これらは端部内面を肥厚する布留式の特徴を有するもので、中には口縁部を内側に折り返して分厚い肥厚部を形成する布留式新相のものがある。

（田上）

S K502（第12回）

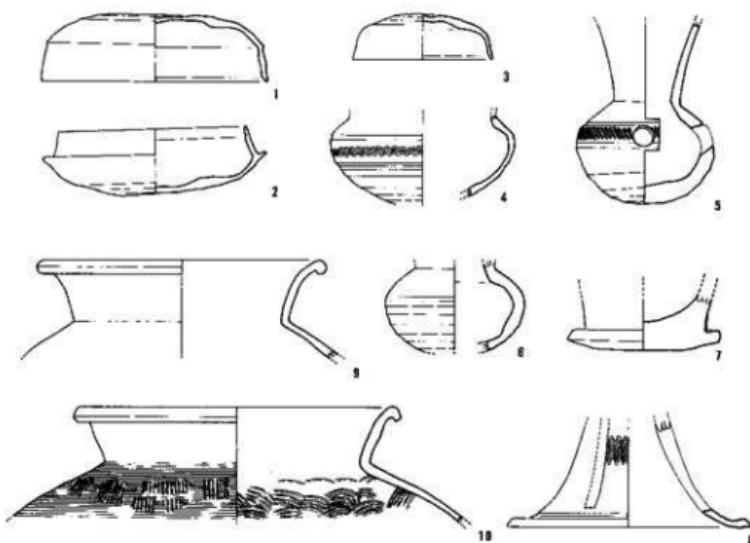
出土遺物はその大半が須恵器によって占められ、その他、岡化し得ない少量の土師器片を数えるに過ぎない。須恵器は多様な器種がみられ、蓋杯をはじめとして、甕・高杯・甕・壺等が挙げられる。以下、須恵器に関してその詳細を記述する。

蓋杯（1・2） 蓋・身共に比較的大型である。杯蓋は口縁端部に段を有するものが多く、垂直あるいはわずかに外方へ傾斜している。口縁部と天井部を分離する稜は極端に突出しない。天井部は扁平でその為、ヘラケズリが及ばない部分がある。回転ヘラケズリは範囲が少なく、荒い仕上げとなっている。

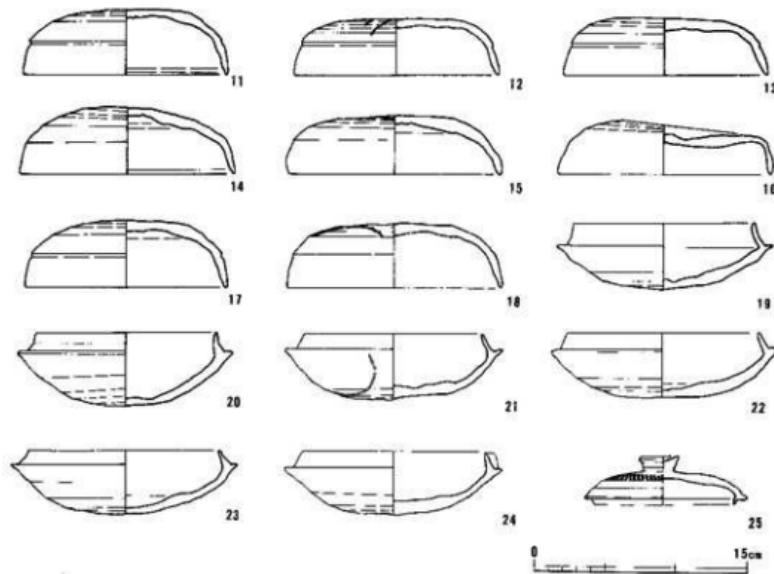
杯身は口縁部が内傾し、それ自体の高さは比較的高いが、端部の段は明瞭ではなく、受部とともに鈍く、丸味を帯びている。

壺（3・4） 短頸壺の体部と考えられるものが一点と、短頸壺の蓋が一点出土している。短頸壺の体部は肩部下に波状文を施し、その上下に沈線を巡らしており、胴下半部は欠損しているものの、残存する部分ではヘラケズリが行なわれている。口縁部の状況は定かではないが、全体のプロポーション、断面観察によると内傾せずに外反する形状を呈し、無蓋である蓋然性が高い。底部の欠損状況、波状文の施文等を勘案すると脚を有していた可能性もある。蓋はツマミを持たず、口縁端部に面を持つ、径の小さなものである。天井部をヘラケズリによって調

第11回 古式土師器実測図



第12図 SK 502出土遺物実測図



第13図 F-6・G-6区出土遺物実測図

整する。

翫（5・6） 直線的に外反する口縁部に段をなした口縁部が伴う。体部は肩の張った球形で体部下半をヘラケズリする。円孔は斜め上方から穿たれ、周囲を櫛描きの列点文で飾る。個体別に装飾の有無、調整技法に若干の差異があるが、全体的なプロポーションでは一致している。

鉢（7） むり鉢が一点出土している。円板状の底部に厚い体部がつく。底面をヘラケズリしており、穿孔はされていない。

高杯（8） 長脚二段スカシ高杯の脚下半部である。端部はやや丸味を帯びた面を有する。櫛描波状文と沈線を有する。スカシは三方向に穿たれている。

翫（9・10） 翫は出土数中で最も多く、復元口径から判断すると比較的小さなものが多い。口縁端部は折り返して垂下させている。外面をナデ調整のみによって仕上げるものと、タタキを施したのち、カキメ調整を行なうものに大別され、タタキ目を有するものは内面に同心円文を有する。

（清水）

F-6・G-6区須恵器群（第13図）

須恵器の杯が大半を占め、完形品が多い。その他、若干であるが翫・高杯・壺等の破片も出土している。また、土師器の細片も少量みられる。

杯蓋（11～18） 口径14.2～15cm、器高3.9～4.8cmを測り、口径、器高ともに比較的統一性がみられる。天井部と口縁部の境にわずかに、鈍い稜線が残るものと、稜の消失したタイプがある。口縁部はやや開き気味に下り、端部は内面に段を有する古いタイプもあるが、概ね丸く仕上げている。天井部は扁平化が進んでいるが、ヘラケズリは比較的広範囲に施されている。胎土は砂粒を多く含み、器壁は厚く、全体に鈍い感を与える。12、14、15、18の天井部には「へ」「一」のヘラ記号がある。また、内面に円弧スタンプを残すものも3例みられる。

杯身（19～24） 口径は12.8～13.4cm、受部径は15～16cmと統めて均一性がある。受部はやや上方に向い、たちあがりは、内傾しながら上方にのびるもの、一旦内傾した後、上方にのびるタイプがある。端部は概ね丸く仕上げられ、段は有さない。器高は20が5.2cmを測る他は、4、5cm前後で杯蓋と同様底部の扁平化がみられる。ヘラケズリは底部の半分以上に施される。21、22、24の底部に「へ」「一」のヘラ記号がある。内面には杯蓋と同じく円弧スタンプが2例みられる。また、21は杯蓋18が重なった状態で出土しており、20も杯蓋17と並んで出土しているところから、セット関係を成すと思われる。

翫（25） 翫などに使用したと思われる小型のもので、シャープなかえりが下方にのびる。天井部には列点文帶が巡り、中央に中窪みのつまみがつく。

S D703

須恵器、土師器合わせて遺物整理箱約10箱分出土している。量的にも器種的にも須恵器が圧倒的多数を占める。器種としては、杯が大半で、その他高杯、翫、壺、樂、器台等がある。こ

のうち蓋の蓋1点が完形で、杯にも若干完形に近いものがみられる。土師器はほとんどが壊の破片である。

前述のように、当遺構はD-3・4区、D-5・6・7区にてそれぞれ別遺構の可能性も考えられるので、以下の説明に際しても一応別個に取り扱うことにする。

D-3・4区 (第14図)

杯蓋 (1~3) 口径15cm強と大型の傾向を示している。天井部はゆるやかなカーブを描き口縁に至る。口縁部と大井部を分ける棱は鈍く、直下の凹線によって、僅かに突出する。口縁部は開き気味に内側する。端部は内傾し沈線が巡る。1の大井部内面には円弧スタンプがあり、2の大井部には細く弱々しい条線が乱雑に10本以上施されている。

杯身 (4~6) 杯蓋に対応して大型の傾向を示す。受部は上外方につまみ出され、たちあがりとの境には沈線が巡る。たちあがりは内傾しながら上方にのび、端部に段を有するものもある。総じて、つくりは丁寧である。底部外面に「一」「ハ」のヘラ記号があり、6の内面には円弧スタンプがみられる。

高杯 (7~13) 有蓋高杯の蓋は口径17.2cmを測り、其伴の杯蓋をはるかに上まわり大きい。口縁部と天井部の境に円線を強いタッチでいれているため、内面側が肥厚している。口縁端部は内傾し段を有する。天井部には2条の凹線と、その間に列点文を右まわりに丁寧に施している。中央には中窪みの大きなつまみがつく。また内面には円弧スタンプの痕跡がかすかに残る。

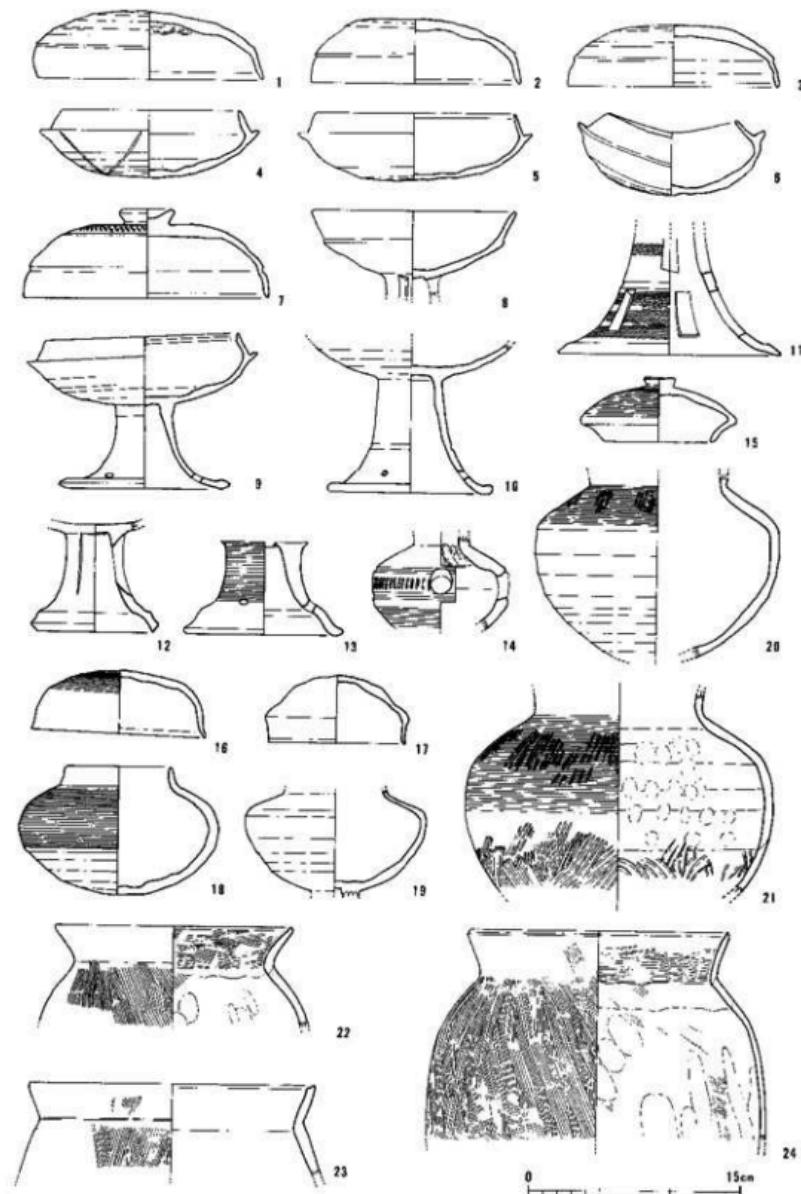
無蓋高杯の脚部にはスカシが3方に開けられている。還元炎焼成不良のため、硬質ながら黄褐色を呈する。有蓋高杯は杯身に、裾が広がり円孔を3方に穿った脚部がつく。10は口縁部を欠くが、杯部と脚部の接合が同一手法であるのをはじめ、脚のつくりに類似性があるため9と同様有蓋高杯と考えられる。大型高杯の脚部は八の字形に広がり、端部は外側に面を有する。凹線を境に上下に細かい波状文とスカシが入る。スカシは上段1方、下段5方に聞く。

甌 (14) 体部はやや肩が張り、体部中央の平坦面の両端に凹線が入る。凹線間には、列点文と円孔を穿っている。底部付近は粗いカキ目調整を施し、頸部から肩部の内面にはしづら目がみられる。12のスカシはヘラで3方に切り込んだもので内面にからうじて達している。

甌 (15~17) 15は丸く盛り上がる天井部中央につまみがつく。天井部端から内傾しながら下がるかえりがつくが、器壁も厚く、シャープさに全く欠け、鈍重な感じを与える。短頭甌の蓋はいずれも口縁端部を外方につまみ出している。天井部の調整は複数のカキ目か未調整である。

甌 (18~21) 蓋を作るもの、伴わないもの、脚の有無がある。短頭甌は、肩部から胴部中央にかけてカキ目、底部にはヘラケズリ調整を行なう。頸部付近に重ね焼きによる色調の変化が認められる。21はやや外反する頸部と肩部が最大径を示す甌である。外面に自然釉がかかる。肩部と体部下半の内外面にタタキ整形を行なう。さらに頸部から体部の上半は細かいカキ目調整、内面には指頭圧痕が残る。
(厚美)

土師器 (22~24) いずれも口縁部から体部にかけてのみ残存しているが、体部の張らない



第14図 SD703(D-3・4区)出土遺物実測図

長胴の體と考えられる。22は口縁部がゆるやかに外反し、端部はつまみ気味に終る。外面は縱方向のハケメ調整、内面はハケメ調整の後ナテ調整を施す。23は口縁部がゆるやかに広く外反し、端部は丸く肥厚する。外面はハケメ調整で、内面はナテ調整である。24は屈曲する短かい口縁部をもち、端部は内傾する面をもつ。外面は縱方向のハケメ調整で、内面は摩滅のため調整不明である。

(田上)

D-5・6・7区（第15図）

杯蓋（1～3） 口径が16cmを越えるものが多い。口縁部と天井部の境には短かく鋭い棱が突出するものと、凹線が巡るものがある。口縁部はやや開き気味に下る。端部は内傾し段を有する。2の天井部には右まわりのヘラケズリが行なわれている。

杯身（4～6） 底部は扁平化の傾向を示す。受部は上外方に鋭くつまみ出されている。たちあがりはやや長く、内傾しながら上方にのびる。端部の仕上げは受部も含めシャープである。6の底部にヘラ記号「一」がある。

高杯（7・8） 口径約24cmを測る大型高杯の杯部が出土している。たちあがりは内傾した後、半ばで角度をかえ上方にのびる。受部は、丸くカーブを描く底部の延長としてつくり出されている。受部下に2条の凹線、くずれた波状文帯、凹線、列点文帯が続き、底部にはカキ目からさらに列点文帯が巡る。底部内面には同心円タタキが明瞭に残る。脚接合部には荒いカキ目が施されている。

甌（9） 上下がやや短かい球形を呈する体部の中央付近に、1条の凹線と円孔を施す。頭基部は太く、頸部は外反気味に上方にのび、口縁部付近で角度を変える。細かい波状文を最多数32条施す。

壺（10・11） 短頸張の蓋とやや大型の脚部が出土している。

器台（12・13） 体部と脚部の破片である。外反する口縁部は凹線の巡る端面をもつ。下半部の内外面にタタキを施している。脚柱部の破片には浅い2条の凹線の上下に長方形スカシとくずれた波状文をほぼ全面に施している。

甌（14～17） 復元口径が20cm未満のものから50cmを越える口頭部の破片である。小型のものは端部がやや丸く肥厚する5cm足らずの外反する口頭部である。大型のものは端部が四角い面を残して張り出す。口頭部には凹線やくずれた波状文が巡る。

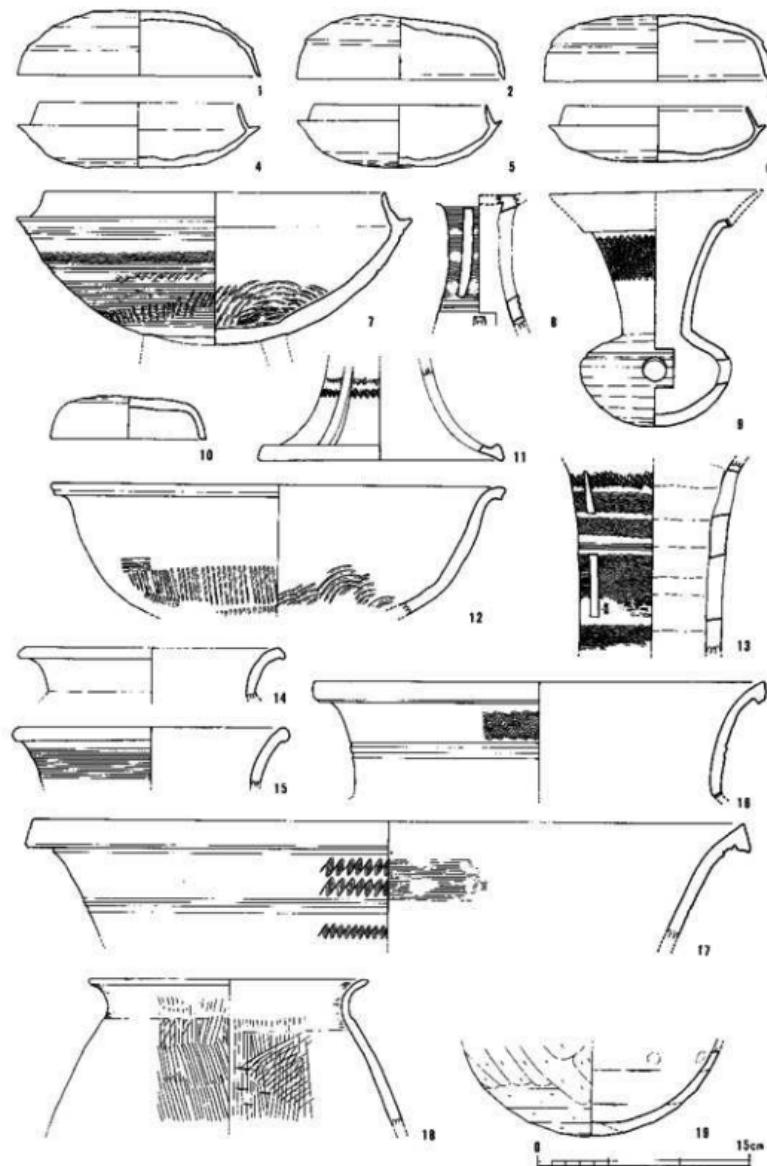
(厚美)

土師器（18・19） 18は口縁部が如意形をなして外反し、端部は丸く終わっている。内外面とも粗いハケメ調整で、器壁は9mmと厚く、全体的に粗雑な感を受ける。19は底部の成形に須恵器の手法を用いる特異な土器である。外底面は回転ヘラケズリで、その上部は斜方向のヘラケズリ、内面はナテ調整である。器種は判然としないが、恐らく甌と考えられる。

(田上)

出土遺物の小結

出土遺物を遺構ごとに図示し、概述したが最後に出土地の大半を占める須恵器について補足の意味も含め、その所属時期についてふれてみたい。



第15図 SD703(D-5・6・7区)出土遺物実測図

S K502の杯は、やや大型で扁平化しており、口縁部とたちあがりは比較的長く、端部に段を有すること、底は基部がやや太く、長く外反する口頭部を有するなど、⁽¹⁾ 桜井谷古窯跡群編年Ⅱ型式2・3段階の様相を呈している。

F-6・G-6区第5層上面出土須恵器群は、S K502に比して杯の口径がやや小型化していること、口縁部と天井部を分ける稜が消失寸前または消失していること、たちあがりが短かくなり内傾度が増していることなどから、Ⅱ型式3・4段階に比定される。

S D703 (D-3・4区)は、杯蓋の口径が15cm強と大きく、天井部と口縁部の境は鈍い稜か四線が巡ること、たちあがりは内傾するが、まだやや長いことなどⅡ型式の2段階の特徴をもつが、基部が細くなりつつある底や肩の張らない塑頭巻など、時期のやや下るものもみられる。

D-5・6・7区では、今回は図示しなかったが口径が18cmを越えるものもあり、杯が最も大型化する頃と考えられる。この他倒卵形の体部にやや基部が太く外反する長い口頭部をもつ底や、長脚2段スカシの高杯の脚等、新しい要素もあり、Ⅱ型式2・3段階と考えたい。

以上、上記の4遺構では、S K502がやや古く、S D703においてはD-5・6・7区で、器台の鉢部と見まちがうほど大型の高杯や器台等、D-3・4区にはみられなかった器種が出土しており、器種構成が若干異なるが、時期的には大差ないと考える。そして出土遺物の大半が杯であったF-6・G-6区第5層上面須恵器群が比較的新しい様相を示していると思われる。⁽²⁾ このように概ね桜井谷古窯跡編年Ⅱ型式2～4段階、泉北陶邑編年においてもほぼ同型式の頃に比定されると思われる。

ところで、今回出土した須恵器の中に、当遺跡東北方の桜井谷古窯跡群出土資料と、極めて類似するものが認められたことを付け加えておく。一・二の例を挙げると、S D703 (D-3・4区)出土の大型高杯脚部 (第14図11) が脚径、装飾性、細部調整の点で、下村町池窯跡出土資料と近似し、また無蓋高杯 (第14図8) についても本資料が口径をやや下回る他は、永楽荘窯跡出土資料と形態的にもはは一致している。以上については実際の資料を直接に比較検討していないので、なお踏まえるべき手続きも多く残しております、これ以上を述べることは控えたい。

(厚美)

註1 木下良「根津桜井谷古窯跡群における須恵器群」『桜井谷窯跡群2 17座』少路窯跡遺跡調査団 1982年

2 中村浩「和泉湯谷窯出土遺物の解説」『陶邑』大阪府文化財調査報告書第30号 1978年

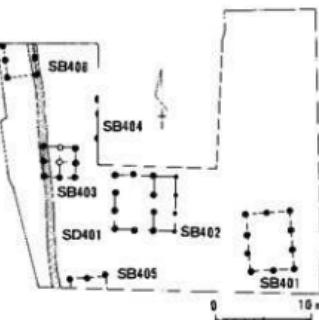
3 「下村町池窯跡」豊中市教育委員会 1974年

4 「桜井谷窯跡群一範囲整理調査」豊中市教育委員会 1977年 第8回29

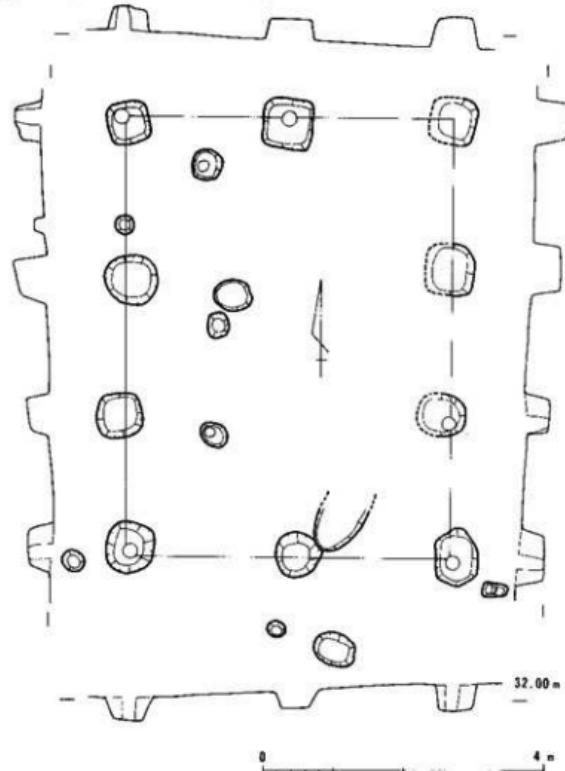
(4) 奈良時代

奈良時代の遺構として、掘立柱建物跡6、溝1、土師器埋置土坑1、その他ピット多数がある。

掘立柱建物跡6棟分のうち、3棟はほぼ全体を検出し得たが、残り3棟については一部ないし大半が調査区外に含まれる。これらはいずれも第4層上面において検出し、全く重複することなく比較的整然とした配置を見せている。すなわち調査区中央部のSB402(2間×3間、袖付き)を中心として、東方に同じく2間×3間の規模をもつSB401、西南方にも東西に並ぶ3個の柱穴列(SB405、SB403、SB404)である。



第16図 奈良時代建物・溝配置図

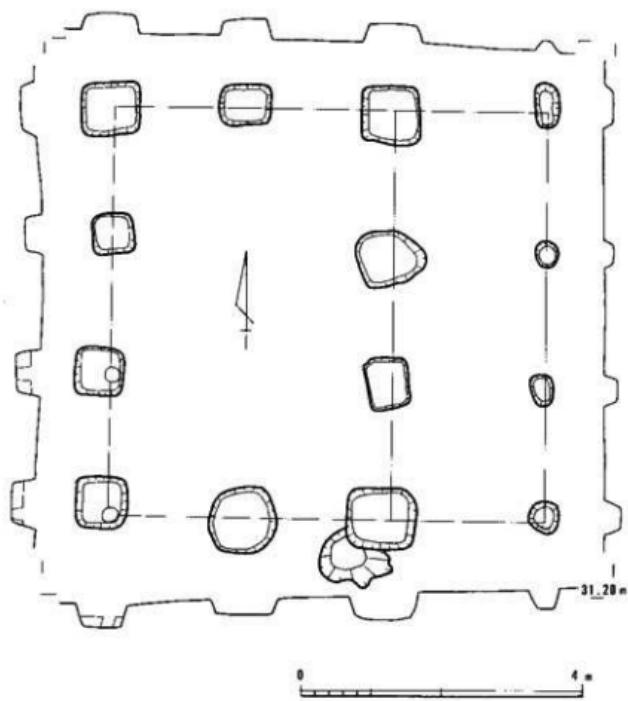


第17図 SB401平面図

405) を検出した。また西北方に 2 間×2 間の S B403、北方に南北に並ぶ 3 個の柱穴列 (S B404) があり、調査区西北隅付近にて 1 間×2 間以上の S B406 が配置している。

また調査区西側の第 3 層上面にて検出した南北に縱走する溝 S D401 は S B403、S B404 の柱穴の一部と重複している。
(服部)

S B401 (第17図 図版3-2) E-91K付近の第4層上面で検出した。桁行はほぼ南北方向であるが、約5度西へふっており、梁行2間(約5.3m)、桁行3間(約6.8m)の独立柱建物跡である。柱穴はトレンチによってすでに半載していたものもあるが、一辺約50~70cmの隅丸方形で、遺存する深さは約20~40cmを測る。柱穴間の距離は梁行1.5~1.7m、桁行1.2~1.5mを測る。柱痕は7個所の柱穴で検出しており、直径20~30cmを測る。柱間の距離は桁行1.7m前後を測り、梁行は SP4002 と SP4003 の間のみで確認でき、ここでは約2.1mを測る。これによつて梁行は概ね2m前後であろうと思われる。
(酒井)



第18図 S B402平面図

S B402 (第18図、図版4-1) D-6、E-6、F-6区にまたがり、主軸方位は磁北とはほぼ一致する。梁行2間(約4m)、桁行3間(約6m)の建物である。検出した柱穴は1辺60~70cmの隅丸方形で、遺存した深さは35~50cmを測る。桁行、梁行ともにその柱穴間は約1.0~1.2mを測る。柱痕は2個所の柱穴で確認しており、直径約20cmを測る。柱痕を確認していない柱穴でも、

10~20cmの砾石が意図的に円を描くように置かれた状況が看取され、柱の位置をある程度想定し得る。これによって復元される桁行柱間は1.8~2.0mである。

東側柱穴列に隣接して約1.6m東側に、直径約40cmの柱穴列を検出しているが、柱穴間の距離が1.8~2.0mあり、S B402の桁行柱間に近似しており、畠付の建物を想定し得るであろう。

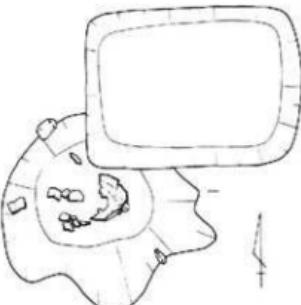
S K401 (第19図・第20図) S B402の東南隅の柱穴に重複する状態で土師器變形土器を埋置した遺構を検出した。遺構の平面形は東西に長い不定形をなし、最大幅約1.0m、遺存した深さ約0.2mを測る。埋土中に炭化物を多量に含んだ焼上層があり、その直上に變形土器がほぼ正立に近い状態で埋置されていた。この遺構は重複関係から、S B402と同時期もしくは先行する可能性があるが、孤立柱建物群はその時期を出土遺物によって、概して8世紀中頃~後半に限定し得ること、遺構検出面が同層位であること、遺構内埋置土師器の特徴等を勘案すると、この遺構も孤立柱建物群と同時期の营造と考えて大過ないであろう。
(清水)

S B403 (第21図、図版4-2) D-4区付近にて検出した東西2間(約3.3m)、南北2間(約3.1m)の握立柱建物跡である。おそらく總柱の建物と推定されるが、中央柱穴および北辺の1柱穴は近年の擾乱のためすでに消滅していた。柱穴はいずれもほぼ正方形を呈し、一辺68~88cm、遺存した深さは10~60cm。柱痕は5柱穴で確認し、直径20cm前後を測る。柱間、すなわち柱痕間の距離は東西約1.6m、南北1.5~1.6mで、東西にやや広い平面プランを有する。總柱の建物であれば、倉庫等の建物が想定できる。主軸方位はほぼ磁北である。

S B404 C-5区付近の調査区縁辺部にて、南北に並ぶ柱穴3を検出した。南北約4mを



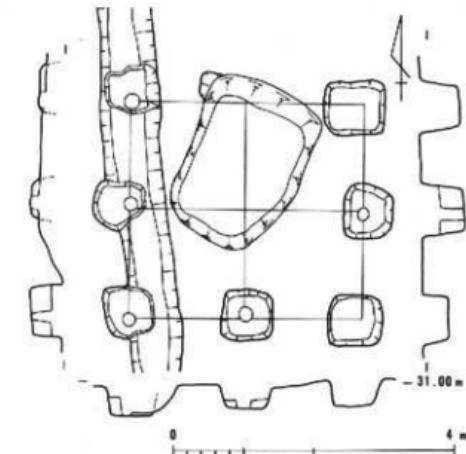
第19図 SK 401検出状況



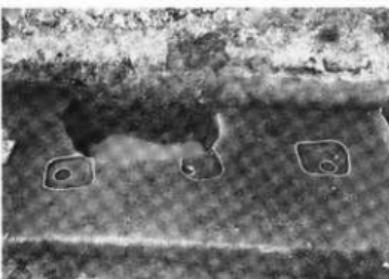
第20図 SK 401平面図

測り、方形に近い柱穴の規模は一辺約45~88cmである。検出面は他の建物と同じく第4層上面であり、規模、埋土、方位の類似性から明らかに同時代のものと判断した。ただし3柱穴は等距離に並ばず、一連の建物に属するかどうかにやや不安が残る。いずれにせよ建物の中心は東側の調査区外に含まれるので、断定は避けるが、一応1つの掘立柱建物として報告しておく。(服部)

S B405 (第22図) 調査区南端西寄りでF-5区、G-5区にまたがる掘立柱建物の一部を検出した。遺構は東西方向に一直線に並ぶ3個のビットで、いずれも隅丸方形を呈し一辺約70cm、深さ約50cmを測る。それぞれからいすれも直径約20cmの柱の痕跡を検出した。柱痕の中心間の距離は1.85mと1.95mである。建物は南側へ続くものと思われるが、調査区外のため全体の規模は明らかにし得なかった。本遺跡における掘立柱建物跡の規模や配置から推定すると、おそらく梁行2間、桁行3間程度の建物であったと思われる。



第21図 S B403平面図



第22図 S B405検出状況

S B406 調査区西北隅にて検出した梁行1間(約1.56m)、桁行2間以上の規模をもつ掘立柱建物跡である。柱穴は円ないし方形を呈し、直径30~40cm。東辺の柱穴列はS D401により上部の大半が消失していた。建物西半部は第7層が大きく落ち込み、その上に堆積した茶褐色粘土の上面から西側柱穴列が切り込まれていた。調査区西方(現在の道路面)が南北方向の小さな谷地形を呈することから判断すると、おそらく谷間に向かう落ち込みの肩部付近に人工的な盛土を行ない、整地したのち建物を営んだものと推定される。そのため盛土中には、建物の上限を示唆する遺物の混入が認められた。

S D401 調査区西側をほぼ南北にはし幅32~44cm、深さ30cm前後の溝である。断面U字

形を呈し、底部レベルは北から南に向けて低くなる。埋土遺物のうち最も新相を示す遺物はすべて奈良時代におさまることから、建物群の廃絶後、さほど時期を隔てず掘削されたものと考えられる。
(服部)

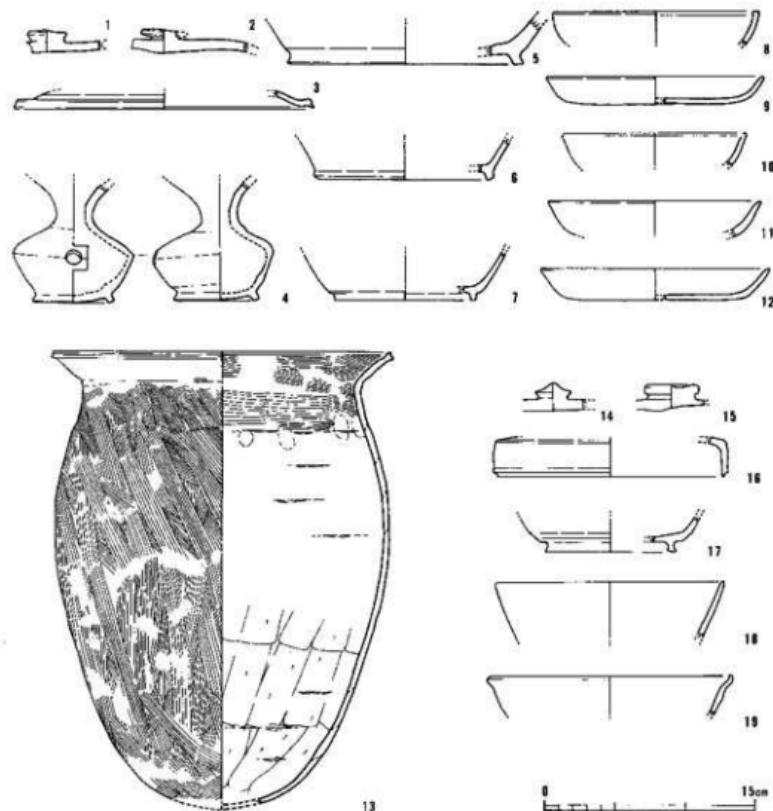
出土遺物

掘立柱建物跡（第23図1～12） 主に柱穴から出土した。1～7は須恵器。8～12は土師器。

杯蓋（1～3）は、中央が窪み気味の平坦な天井部に擬宝珠形の扁平なつまみがつく。口縁部は外方へのび、端部は下方につまみだされる。

杯身（6・7）は、底部端に断面四角形の高台が付され、口縁部は上外方にのびる。

翫（4）は、算盤玉状を呈する体部中央の張り出し部に円孔を穿っている。細くしばった口頭



第23図 奈良時代出土遺物実測図

基部は円孔の背面よりにつけられ、口縁部は大きく外反する。底部には八の字状に広がる断面四角形の高台が付されている。S B406下部の祭地層出土のものである。

5は、並の底部と思われる。平坦な底部端に接地面の広い高台が付されている。

杯(8・10・11)は、口縁部の特徴から3形態に分けられる。上外方にのびる口縁部が端部付近で浅く凹み、内面に沈線が巡るもの(10)、端部付近で内窓気味にたちあがり、上端部が面をなすもの(8)、口縁部は上外方にのび、端部は丸くおさめられているもの(11)がある。いずれもナデ調整である。

皿(9・12)は、扁平な底部から斜上方にたちあがる体部をもつ。口縁端部を丸くおさめるもの(9)、上外方につまみあげぎみに終わるもの(12)がある。杯と同様、比較的精良な胎土が用いられている。

(厚美)

S K401 (13)

長胴形の甕で、外面はハケメ調整(1cmに約10条)、内面はヘラケズリとやや粗いハケメ調整を施す。口縁端部は上下にやや肥厚させて面をもち、沈線を1条巡らす。胎土は小砂粒を含み、淡褐色を呈する。胴部中央付近には黒斑を有する。

(清水)

S D401 (14~19)

19のみ土師器、他は須恵器である。

壺(14~16) 14・15はつまみ付近のみである。やや平たい宝珠形を呈するものと、中窪みで中心のみわずかに突起するものがある。16は天井部から直降する口縁部をもつ。端部は外側に段を有する。

杯身(17・18) 17の体部は平坦な底部から屈曲しながら上外方にのびる。高台は底部端からやや内側に付され、接地面で幅を増す。18は直線的に上外方にたちあがる口縁部である。

杯(19) 上外方にのびる口縁部は、端部付近でわずかに屈曲し、端部は上方につまみ出されている。

(厚美)

IV. まとめ

以上に述べてきたように、当遺跡は旧石器時代から奈良時代にかけての、極めて長期に亘る複合遺跡であることが判明した。調査最終段階において時間的余裕を持てず、縄文・弥生時代の遺構については必ずしも詳細に把握できたとは言い難いが、それでも遺跡の中心をなす古墳時代後期および奈良時代に限っては、種々の問題を包括する遺構・遺物の検出を見るに至った。以下、当遺跡が提起する問題点について若干の考察を加え、まとめとしたい。

旧石器・縄文時代 これまで豊中市域で出土した旧石器として、堂池西遺跡(2点)、大塚古墳墓塙埋土出土のものが挙げられ、今回のものを含め4例を数えることとなった。これらはいずれも豊中台地、およびその縁辺部に限られ、範囲もかなり広域に及んでいる。しかし現在の沖積平野部において該期の遺物が検出されないのは、基本的に調査深度が厚い沖積層より下部の洪積層に達しないことに起因するものと見られ、実際の遺跡の分布範囲は、さらに広域に及ぶことが予想される。

また今回出土した縄文土器は、いずれも晩期に属し、うち1点は明らかに最終末期の長原式の特徴を有するものである。近年豊中市域でも、該期の遺物を出土する遺跡は増加しつつあるが、特に本年5月に実施した山ノ上遺跡第3次調査では、幅約50cmの比較的小規模な溝より、弥生前期中段階の土器片とともに縄文晩期(長原式?)の土器片が出土しており、豊中台地縁辺部における、両文化の接触期の様相を伝える好資料となっている。翻って当遺跡では、現整理段階にて断言は控えるべきであろうが、これまでに弥生前期とおぼしき遺物を確認しておらず、併行期の両遺跡が弥生文化との関わり方において、それぞれ異質な性格を有していた可能性も考えられる。

古墳後期の集落と窯跡

今回検出した遺構の半ば以上は、古墳時代後期の段階に属し、それと共に出土した須恵器もほう大な量に及ぶ。特に2棟分を数える獨立柱建物跡の存在は、当遺跡の集落としての機能を想定させるし、一方、大量の須恵器を一括投棄した溝や、大型土壙の存在は、須恵器生産と何らかの関わりを持った人々の居住を推定させる。近年、阪南(陶邑)古窯跡群にはほど近い、堺市辻野遺跡や、同小角田遺跡にて、多数の獨立柱建物跡と共に大量の須恵器が一括出土し、生産された須恵器の集積・選別・搬出に関わる遺跡であることが推定されている。調査面積も秋く出土量もそれとは比べべくもないが、北部窯跡群との位置的な関係をも含め、当遺跡もまた上記2遺跡と同様な性格を有すると見ることが可能であろう。豊中市域では、これまでにも本町遺跡・新免遺跡など、豊中台地東端部における古墳後期の集落の存在が知られており、特に本町遺跡では獨立柱建物と共に、不定形な溝の中から多量の須恵器が出土し、中には生焼け、焼け歪みのもの、さらに窓体の破片が発見されたもの等の存在が注目されている。したがって以上

の遺跡もまた、柴原遺跡と同様の性格を有していた可能性が高く、それらがいずれも千里川流域に沿って立地することも、上記の想定をある程度支持するものであろう。今後各遺跡出土の資料を詳細に分析し、時間的な問題も含め、今後の研究に期待が持たれるところである。

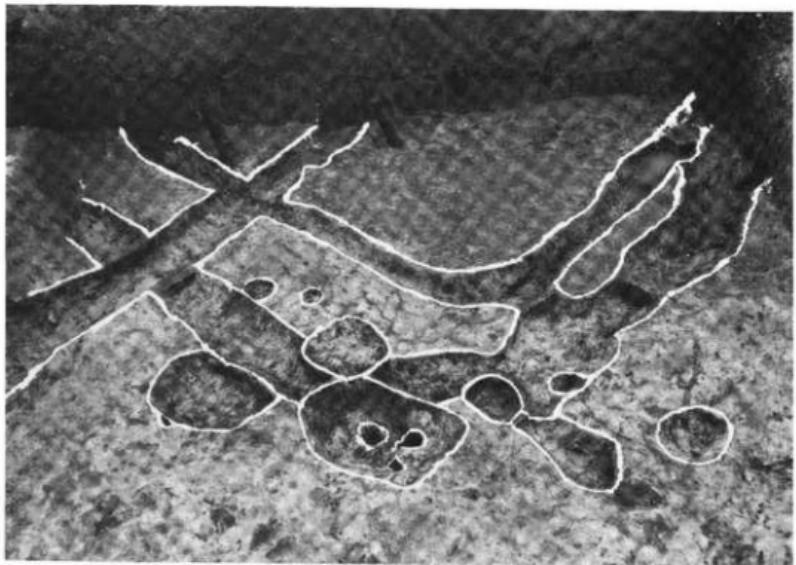
なお当遺跡の周辺約1kmの範囲に3基の窯跡が確認されており（柴原安楽寺窯・柴原乳母谷池北窯・下村町池窯）、このうち分布地点のみ判明している柴原安楽寺窯跡を除くと、2基とも当遺跡出土の須恵器と類似するものが認められる。特定器種に限らず一般的な杯、杯蓋についても型式的に併行期と見えられることから、成形、調整手法に見られる共通点、相違点をより細かく抽出することにより、当遺跡と窯跡との搬入、搬出関係を具体化できる可能性は極めて高いといえる。

奈良時代建物の配置状況とその変遷 奈良時代に属する掘立柱建物跡は6棟を数え、それらの配置状況から見る限り、SB403とSB404がやや近接している他は、いずれも一定の距離を隔て、重複することなく整然と配置されている。各遺構の柱穴には、抜き取り等、建て替えに伴う痕跡を全く残さず、全て同時併存していたとしても人過ないものと見られる。ただ各遺構の主軸方位について見ると、大きく2群に分類され、SB401、403、404が磁北とほぼ一致するのに対し、SB401、405、406はいずれも磁北よりわずかに西にふっている。また主軸を磁北にとる3棟の建物は、いずれも調査区中央部に集中し、他の3棟がこれを取り囲むように周囲に配置されている。

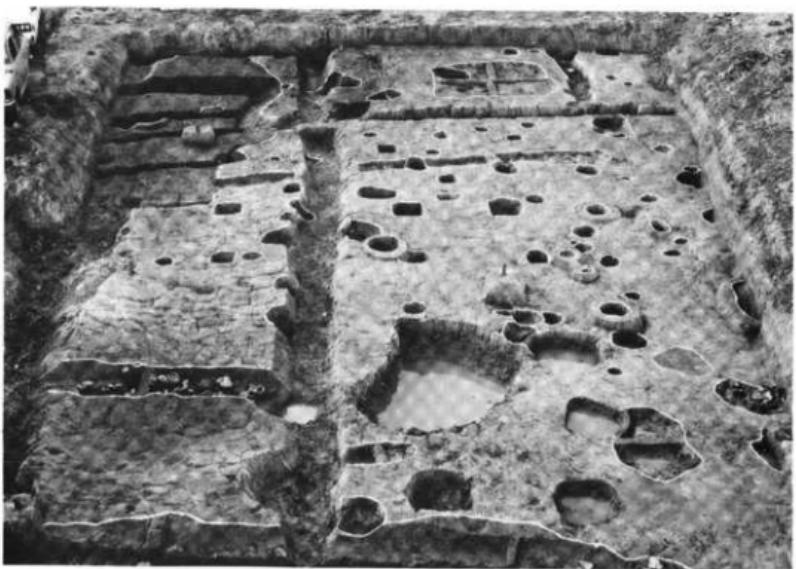
以上2群の建物跡が、主軸方位の差に示されるごとく、ある一定の時期差を示唆するものとすれば、まず第1段階として中央の3棟が成立し、その後、一定の時期を経て、すでに存在する建物群の周間に他の3棟が相ついで営まれたものと見ることが可能であろう。このことはあくまでも推測の域を出るものではないが、両者はそれぞれ重複することなく、整然と配置され、しかも中央群には今回検出した建物のうち唯一の縦付き埴物が、存在しそれに付随するかのごとく純粋の建物（倉庫）が位置することからも、一定の支持を得るものと考える。かかる想定にもとづく限り、当遺跡にて検出した奈良時代集落は、中央群を中心とし、時間的推移の中で順次拡大の方向をとったものと考えられる。しかし、それも極めて短い期間の出来事であったと推測され、同じ場所に再び居を構えることなく、廃絶もしくは他所に移動したものと思われる。

いずれにせよ、今回の調査区は面積的にも限られ、散発の遺構の一部はなお周辺部に埋没していることが予想されるので、より詳細な集落論については、今後に委ねておきたい。

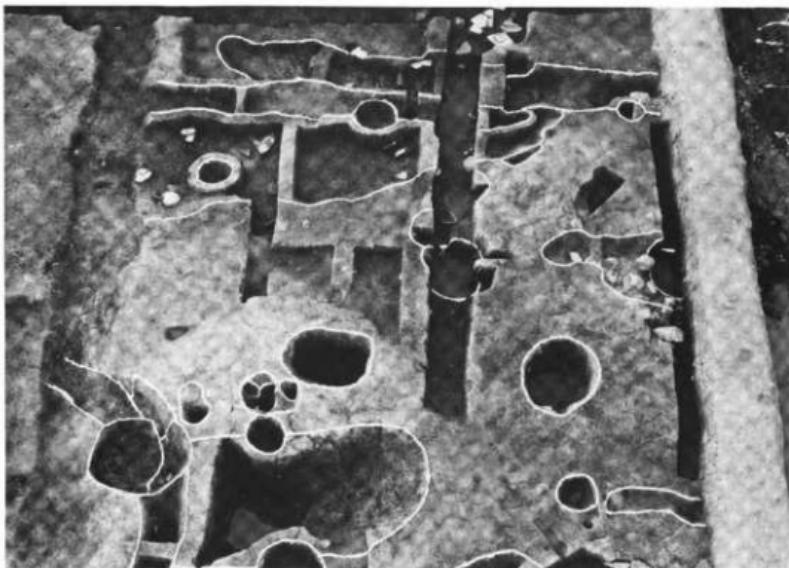
（服部）



(1) S B701 (東から)



(2) 遺構全景 (I 区・南から)



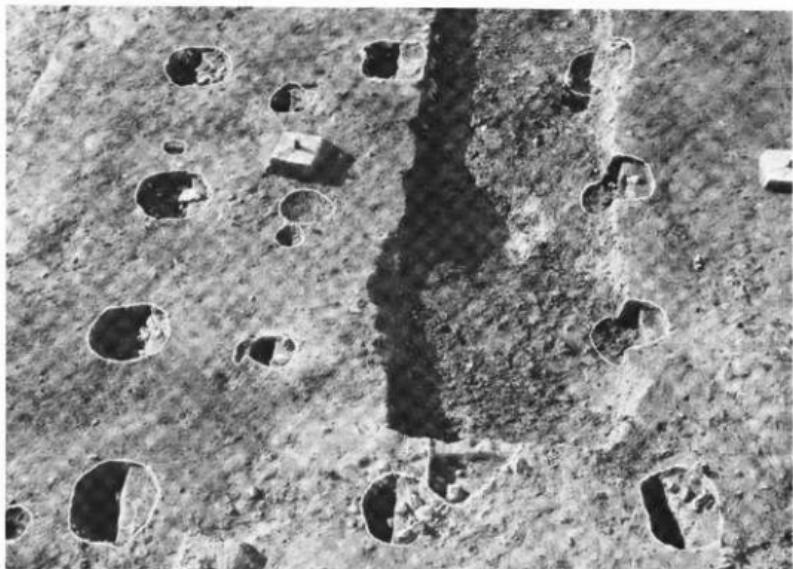
(1) 第5層上面遺構全景(II区・南から)



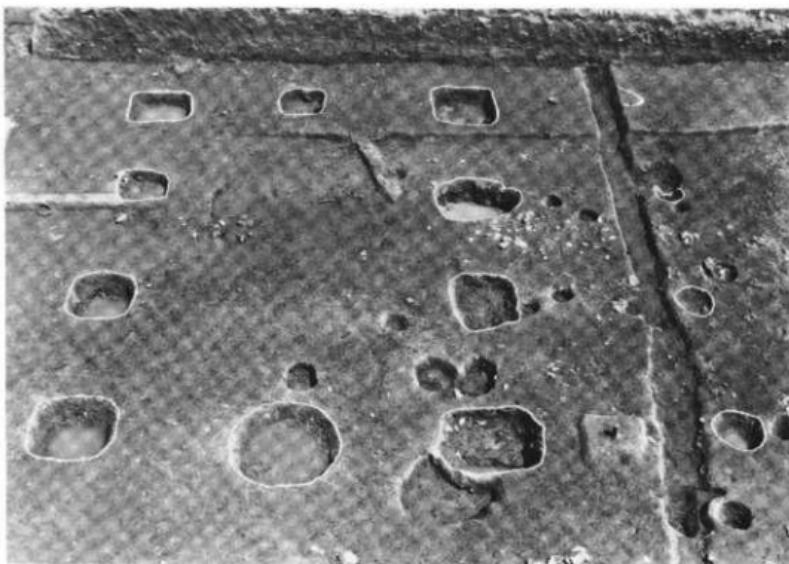
(2) SK502(西から)



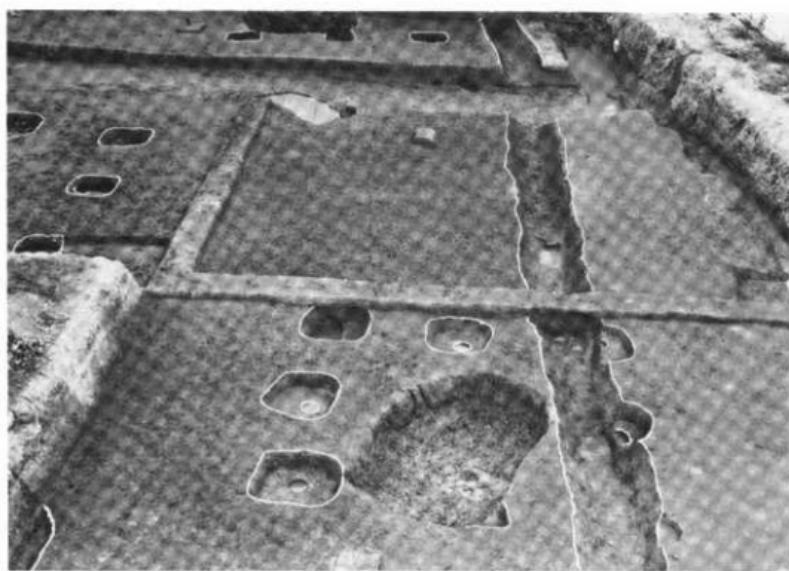
(1) S D 703 (南から)



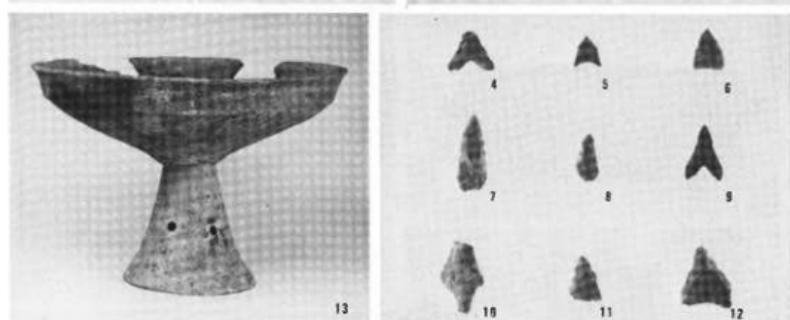
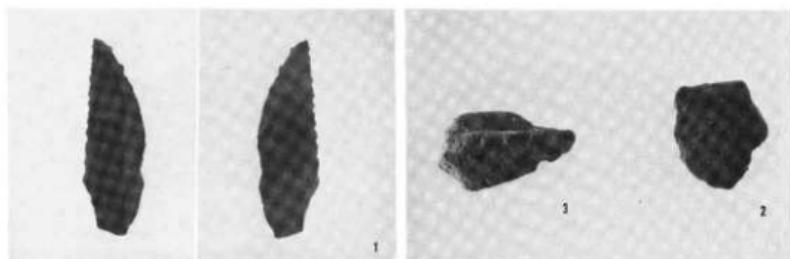
(2) S B 401 (南から)



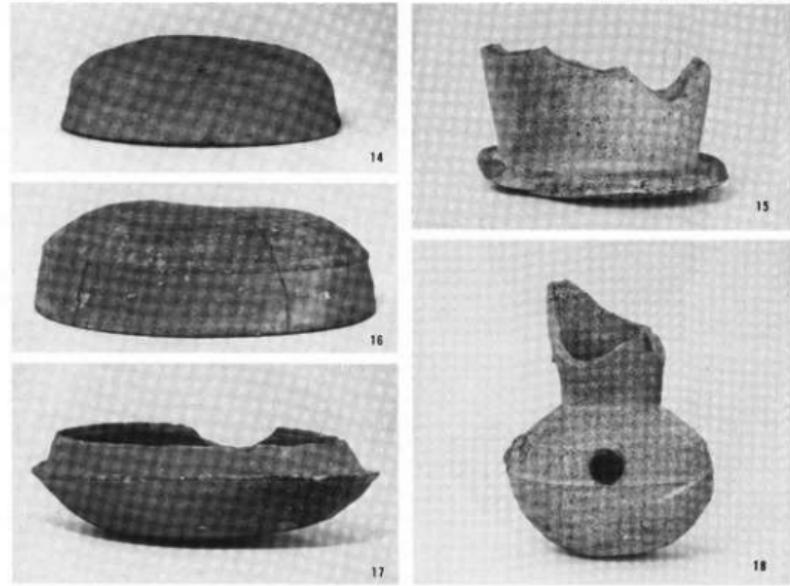
(1) SB402 (南から)



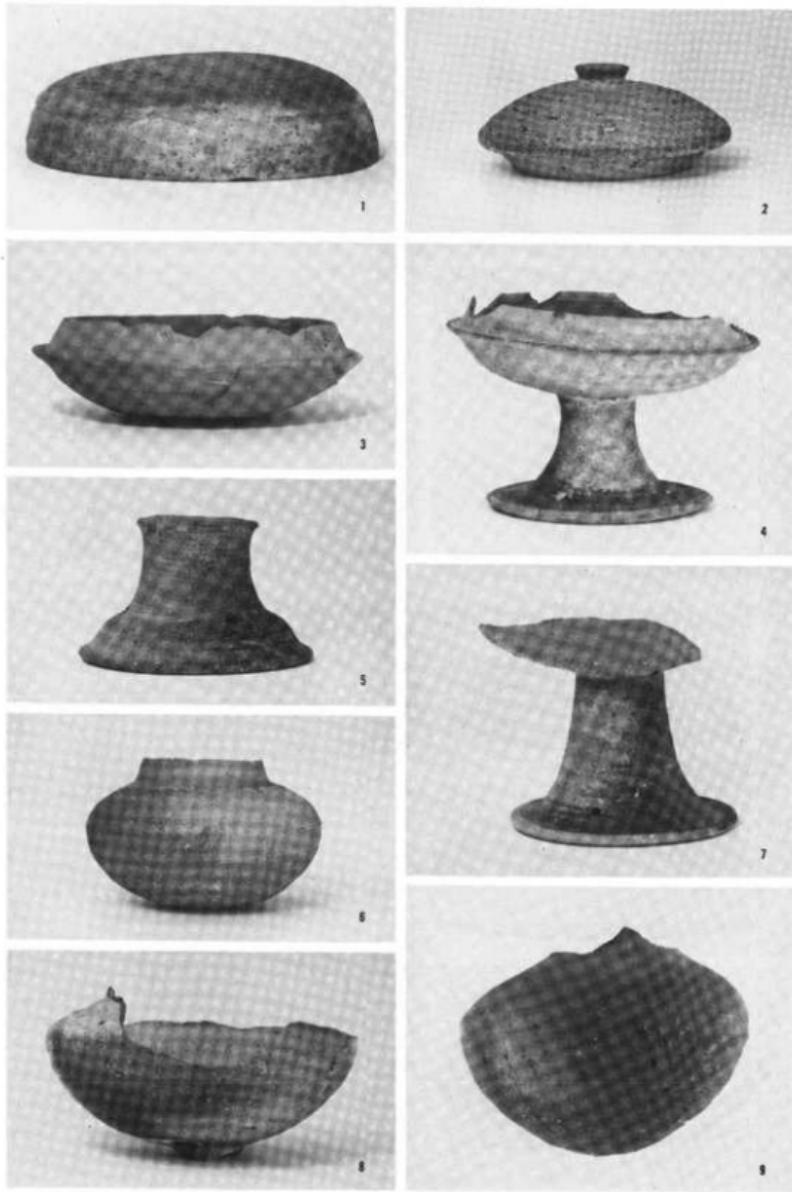
(2) SB403, SD401 (上: SB405, 左: SB402, 北から)



旧石器～弥生時代出土遺物



SK502 出土遺物



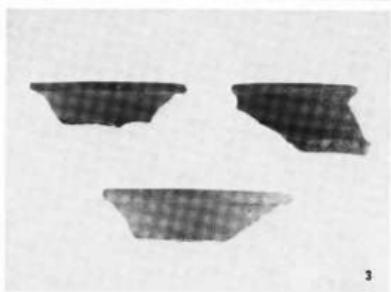
S D703 (D-3・4区) 出土遺物



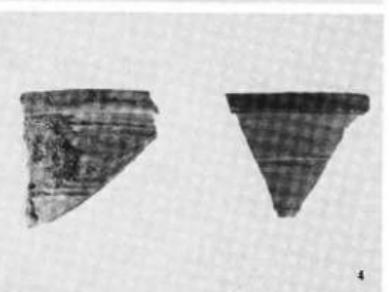
1



2

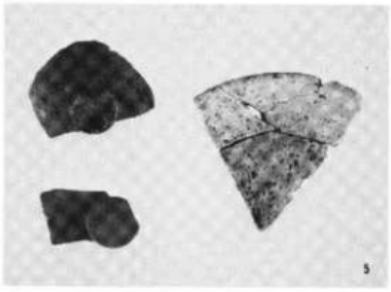


3

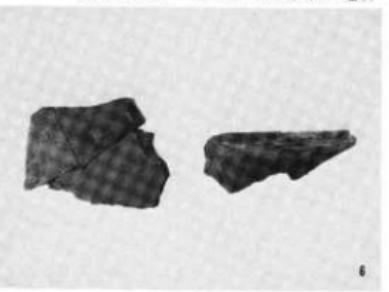


4

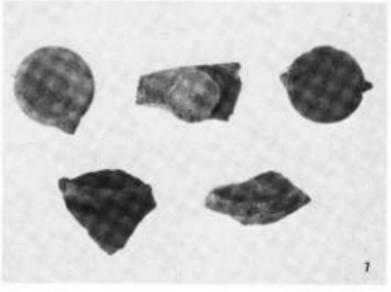
S D 703 (D-5・6・7区) 出土遺物



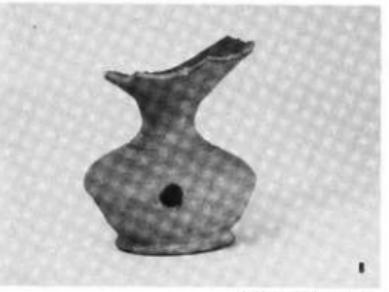
5



6



7



8

奈良時代出土遺物

山ノ上遺跡第5次発掘調査概要報告

例　　言

1. 本書は、豊中市宝山町78-6番地において実施した個人住宅建築工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、昭和60年1月14日から同年1月31日にかけて実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育部社会教育課文化係が実施し、柳本照男が現地を担当した。
4. 本書の執筆は、出土遺物を田上雅則が、その他を柳本が分担した。編集は柳本が行ない、橋本正幸の協力を得た。
5. 土地所有者黒本敏雄氏には、建築確認時のお願いであったが、心よく快諾していただいた事に対し感謝いたします。また隣接地、土地所有者田上憲一氏には埋蔵文化財に対する認識を十分示され、その御好意により未調査部分の調査が行なわれた事に対し、深く感謝いたします。

目　　次

I　はじめ	41
II　周辺の遺跡	41
III　調査の概要	42
IV　出土遺物	46
V　まとめ	49

I. はじめに

調査地点は豊中市宝山町78-6番地である。共同住宅建築に伴う立会調査の結果、遺跡が確認された。建物範囲115.4m²を中心調査を実施した。

II. 周辺の遺跡

山ノ上遺跡は通称豊中台地の中央西端に位置し、この台地から南に派生する小丘陵標高約16mに立地する。東側は南に開く谷で、西側は沖積低地に下降する。したがって平野部に接した眺望の良い場所である。昭和57年に実施した第1次調査地点を初めとし、この台地上で遺跡が広範囲に及ぶことが明らかになってきている。また、時代も弥生時代から中世におよんでいる。この地点より南170mの所では若干の縄文晩期の土器と共に弥生前期の土器が出土している。このことは、西方約900mに位置する勝部遺跡とも絡み注意したい所である。低地では、前述した勝部遺跡や田能遺跡など、この地域の中心的遺跡が所在する。台地上では北方に新免遺跡(弥生時代～古墳時代)、東方400mでは、小石塚・大石塚古墳が位置し、周知の桜塚古墳群を形成している。弥生時代においても、東方約600mに位置する原川神社の境内から流水文の銅鐸が出土している。このように、弥生時代から古墳時代にかけて、特に注意るべき地域である。



第1図 調査地点位置図

る。

今回検出した住居址も、古墳時代前期末から中期のものであり、桜塚古墳群の一端を担う人々の集落であることが判明したことは意義深いことである。

III. 調査の概要

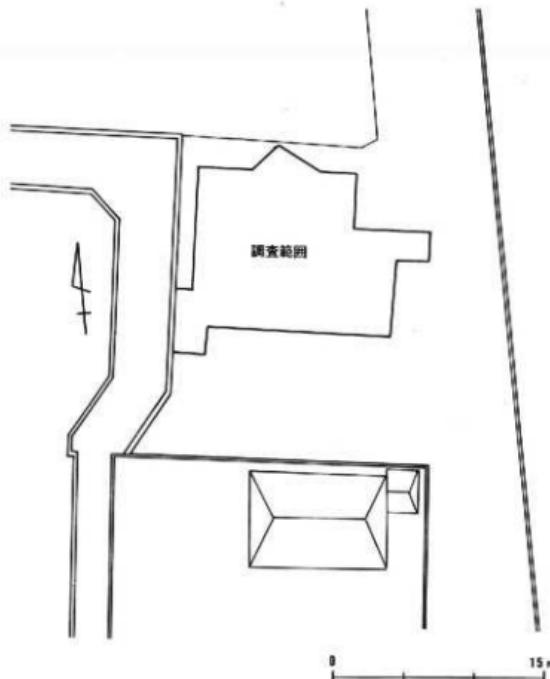
検出した遺構は、掘立柱建物跡、竪穴式住居址、土塁等である。

基本層序は2層からなる。第1層は表土で耕作土、第2層はその床土である。包含層は検出されず、削除されてしまったものである。

したがって、耕作土を除くと地山である。遺構内の部分のみ純粹に残存していた。表土面から地山まで約20cmである。しかし西方の若干高い部分は建築に伴う整地作業で削られ、地山が露出している。以下それらの遺構を概述する。

第1号住居址

調査地の中央北側で検出したもので、上部

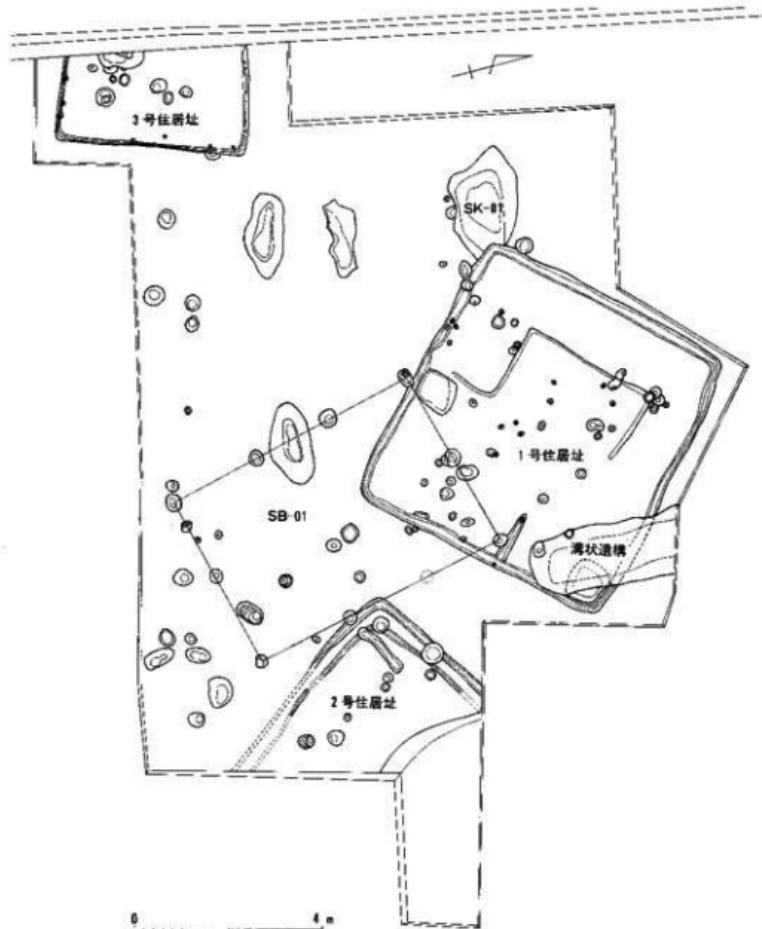


第2図 調査範囲図

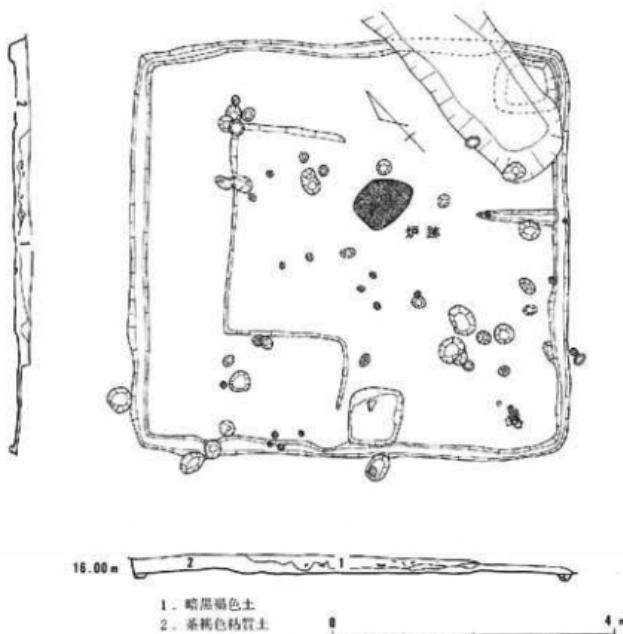


第3図 周構断面写真

はすでに削平されている。床面までの残存高は北東部で40cm、南西部で20cmである。住居の4隅が東西南北を向く、ほぼ正方形に近い平面形プランである。長軸6.2m、短軸5.8mで床面積約36m²である。短軸方位がN 42° Eを示す。床面周囲には上端幅20cm程度で断面逆台形状の周溝を巡らし、床面とのレベル差は10cm前後である。溝内の埋土を観察すると、概方向に層が2分される。外側は幅5cmの暗黒褐色粘土、内側は地山の土をブロック状に含んだ暗黄茶色粘土である。この埋土の地積状況より周溝は排水の機能としてではなく、竪穴内壁に造られたものである。



第4図 造構検出全体図



第5図 1号住居址平面図・断面図

た板材による周壁痕と、その埋め土とみられ、そのために設けられた溝と考えられる。住居の西北側には幅1.2~1.5m、比高差3~5cmを割るコの字形の高まりが床面に認められ、所謂ベット状造構を形づくる。また床面中央よりやや東北よりに長径80cm、短径60cm、深さ6cmの浅い焼土塗があり、炉跡と考えられる。西南壁中央よりには一辺70cmの正方形を呈する土塗がある。この土塗内から高杯の脚部が1点出土しており、住居使用時に作る唯一の資料である。柱穴跡は多数検出したが、時期が降る柱穴もあり、混在している。しかし主柱は4本と考えられ、その径は15~20cm、深さ30~40cmである。

竪穴内の埋土は2層からなる。竪穴が埋没していく過程の堆積土で、第1層は中央部で土塗状の凹みが形成された後の堆積土で、この中に多量の土器片が放棄されている。第2層は竪穴廃棄後から、中央部に凹みが形成されるまでの堆積土で、土器は床面より離れた状態で出土している。

第2号住居址

調査地の東側で検出したもので、西側コーナー付近の周溝のみがかろうじて検出できた。プランは方形で、北西から南東方向に主軸をとるならば、N-30°-Wである。検出した遺構は、

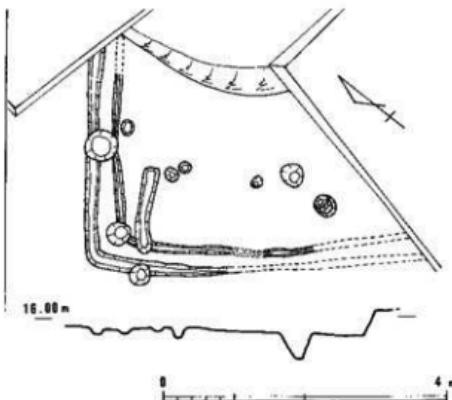
周溝と若干の柱穴跡を検出したが、柱穴は他の時期のものと混在している。周溝は2条認められ、増改築の可能性があるが、前述した様な残存状況のため、前後関係等は不明な点が多い。住居に伴う柱穴は詐らかにし難い。

第3号住居址

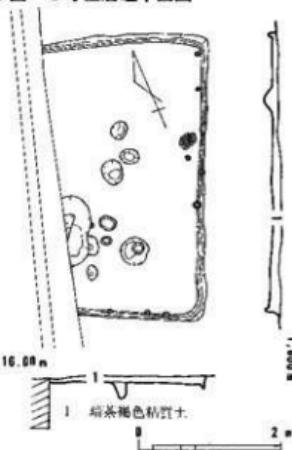
調査地の西側で検出したもので道路によって半分程失なわれている。平面形は方形プランを呈し、一边4mを測る。南北方向に主軸をとるならばN-20°Eである。床面周囲には上端幅8cm、下端幅4cmの幅の細い周溝が存在する。床面とのレベル差は8cmを測る。この周溝も第1号住居址と同様竪穴内壁に巡らされた板材による周壁底と考えられるが、溝幅より推して掘り方をもつものではなく、板材を上から打ち込んだものと推定され、溝下端幅が板材の幅である事が類推される。また周溝の床面側には径8cmの小ピットが認められ、板材固定の杭と考えられる。主柱穴と考えられるピットは径40cm、深さ20cmのものと、径20cm、深さ20cmの2基認められ、恐らく4本の主柱構造をもつものと思われる。床面西南側には長軸1mの不定形を呈する土塗が存在する。この住居に伴う遺物は主柱穴内及び上塙から出土しているが、量は少ない。竪穴内の埋土は暗茶褐色粘質土、1層である。東側中央壁近くで床面が若干焼けている箇所があるが、炉跡かどうかはっきりしない。

掘立柱建物跡（SB-01） 調査地の南東部で柱穴が多く検出されているが、その中で1棟分復元しえたのでそれのみ記述する。復元した建物跡は、2間×3間で長辺5.6m、短辺4m、面積22.4m²である。長辺を主軸にとるとN-12°Wである。柱穴の間隔は1.8~2mとばらつきがある。出土遺物を参考にすると時期は古墳時代後期に推定される。

土塗 上塙は東西方向に主軸をおく、船形状の不定形なものが4基検出されている。いずれもゆるい弧状を呈している。出土遺物はSK-01の上層でサヌカイトの剝片が出土地しているの



第6図 2号住居址平面図



第7図 3号住居址平面図

みである。時期は定かにし難いが、方向に規則性がみられるなど同一時代のものと推測され、前述のサヌカイトの出土などから弥生時代のものと推定しておく。

溝状造構 1号住居東側コーナー部分を南北に切っているもので幅1.3m、深さ0.2~0.25mを計る。断面はU字形を呈する。北側の木調査部に延びるため、規模、性格は不明である。竪内より須恵器が出土することから古墳時代後期のものであろう。

IV. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は古式土師器、製塙土器などがあり、第1号住居堆積埋土内からのものが大半を占めている。

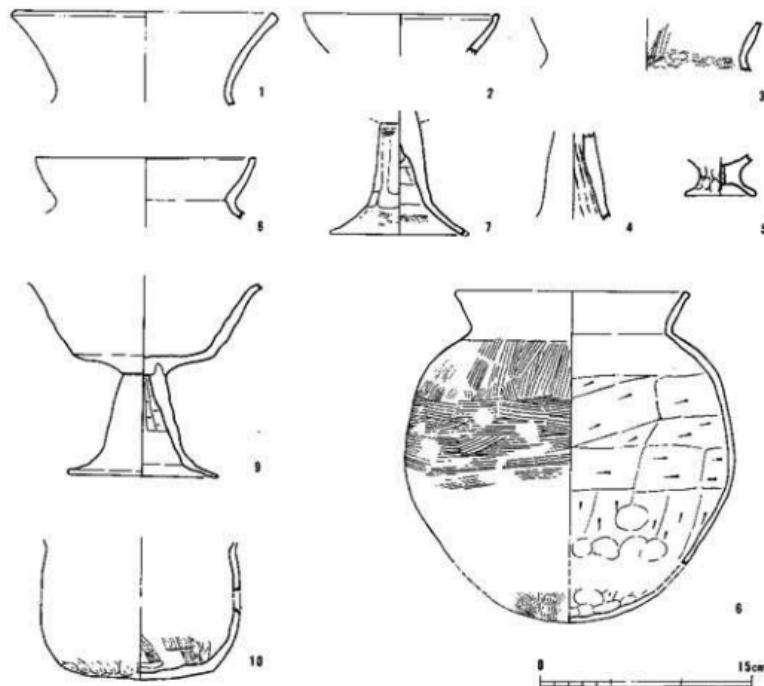
第1号住居からは住居内土壙のものと、住居内堆積埋土、上・下各層からのものがある。

第1号住居内ピット出土遺物(第8図・7) 高杯の脚部が一点出土している。細長い柱状部で、脚部はなだらかに屈曲して大きく開く。柱状部外面にはヘラ状工具により、面取り状に行なわれており、内面は絞り目の上をヘラ状工具によるナデ調整が行なわれている。脚部は内外面とも横方向のハケメ調整が施されている。

第1号住居下層出土遺物(第8図1~6) 壺(1)は上外方に開く広口のものである。(2)の甕は口縁端部が内側に丸く肥厚する。(3)も甕であるが、口縁端部は欠損している。(6)はほぼ完形になるもので、球形に近い体部に丸底を有しやや外反する口縁部がつく。口縁端部は内外へ若干肥厚する。外面は縦方向及び横方向のハケメ調整が施されるが、布留型甕にみられる横方向の規則的なハケメと比べ乱れたものになっている。内面は底部から上部3分の1の高さまで指頭压痕が認められ、それ以外はヘラケズリの後ナデが施される。器壁はやや厚手である。高杯(4)は脚部のみで、内面に絞り目が認められる。(5)の製塙土器は、外反する小さな脚台のみ出土している。外面は2次焼成のため淡赤褐色を呈す。

第1号住居上層出土遺物(第10図) 壺は口縁部のみ出土しており、屈曲して立ち上がる口縁部を有するもの(1)、内傾し所謂複合口縁部を有するもの(2)、上外方へ開く直口のもの(9)がある。(2)は口縁部が欠損しておりどのような口縁部を呈すか断定し難い。何れも摩滅著しく調査不明である。(6)の甕は口縁端部が内傾する面をもつていて肥厚するものである。(7)の甕は口縁端を欠損している。調整も摩滅のため不明である。(8)は体部上半まで残存している。球形の体部を有し、口縁部は屈曲して上外方へ伸び、端部は外傾する面をもつて終る。外面は粗い縦方向及び横方向のハケメ調整で、内面はヘラケズリである。器壁はやや厚手である。高杯は底部からなだらかに屈曲して口縁部に移行する形態を示す杯部(10)と、柱状部からなだらかに脚部となる脚部(11、12)がある。(13)は底部であるが器種は判然としない。

第3号住居出土遺物(第8図8~10) 第3号住居出土遺物としては、住居内ピット(8、10)、

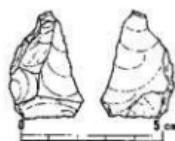


第8図 1号・3号住居址出土遺物実測図

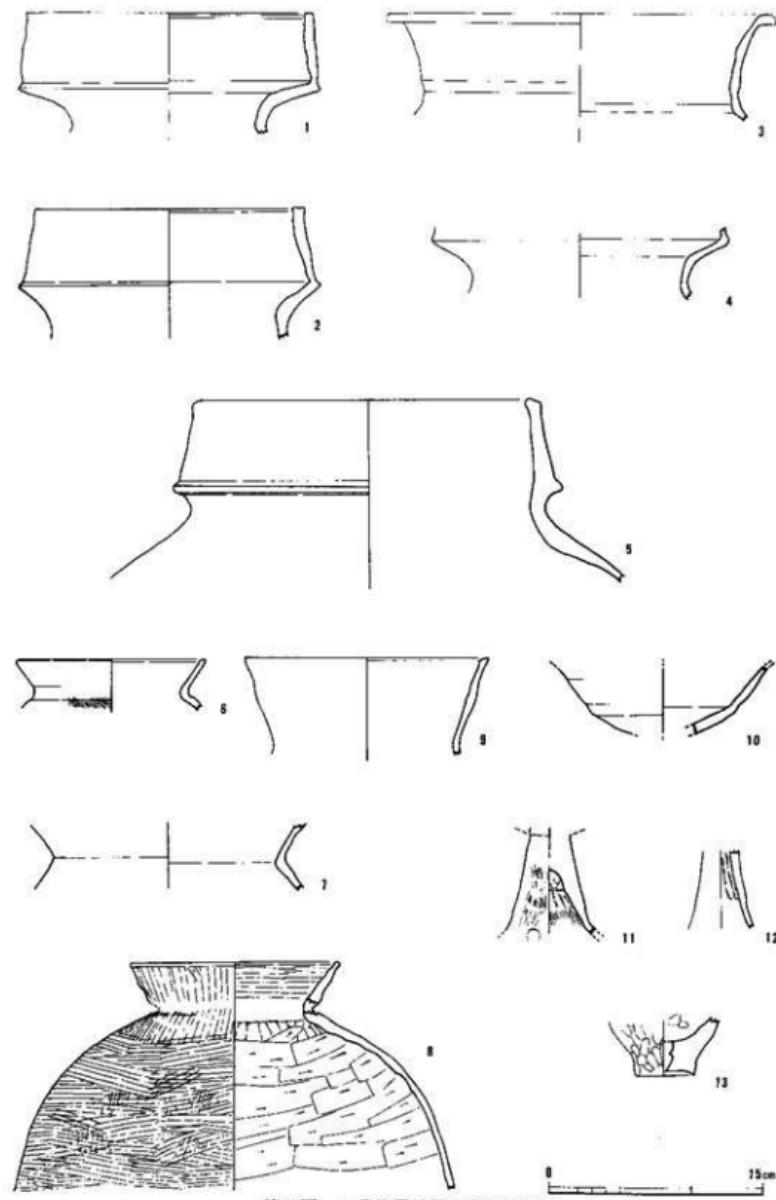
及び住居内堆積埋土内のもの(9)がある。(8)の甌は口縁部のみ残存している。内堀しながら外反する口縁部で、端部は内傾する面をもち肥厚せずに終る。内外面とも摩滅著しく調査不明である。(10)は平底を有し体部の張らない甌である。外面はヘラケズリ、内面はハケメ調整で、厚手の非常に粗雑な作りである。(9)の高杯はほぼ全体の形態が判るものである。杯部はやや平坦な底部から屈曲して上外方へ伸び、端部で更に屈曲する口縁を有す。脚部が大きく広がるものである。摩滅の著しいものであるが、脚内面に横方向のヘラケズリが認められる。SK-01埋土より、所属時期不明のサヌカイト剝片が一点出土した(第9図)。サヌカイト剝片との共伴関係を示す遺物はない。長さ38.2mm、幅27.2mm、厚さ0.76mmを測る。

以上、今回出土した遺物の概要を述べたが、若干その時期的な位置づけを行なってみたい。

第1号住居より出土した土器のうち、層位的にみて住居内土塗出土の高杯(第8図7)が最も占いものと考えられる。布留式土器編年において高杯は比較的スムーズに型式変化の認められ



第9図 石器実測図



第10図 1号住居址掘出遺物実測図

るものであるが、脚一点のみでは決の難い。しかし、その形態は小若江北遺跡出土土器群のものに類似するものの、外面には面取り状という新しい調整を備えており、布留3式の古相に位置づけられるものと考える。⁽¹⁾

第1号住居堆積埋土内出土上器は上・下層よりそれぞれ出土したが、器種が貧弱で懸念はあるものの概ね同時期のものと考えられ、また第3号住居内ビット内出土のものも同時期と思われる。これらの時期は、甕にみられる粗雑な調整と器壁の肥厚化より布留3式に比定できる。⁽²⁾

第3号住居堆積埋土内出土の高杯(第8図9)は利賀西遺跡第1区拡張区第6層土器群3や八尾南SE-1など須恵器出現期の土器群にみられるものと同系列にあると考えられるが、杯部がやや浅く脚柱状部が中ぶくれする点、時期的に遅ると思われ、布留3式でも新相を呈するものと捉えられる。上述のように、本調査区の住居内より出土した土器は、層位的には上下関係があるものの概ね布留3式に位置づけられるものと考える。

布留式土器編年における当段階は、小若江北遺跡出土上器を指標とする布留2式のものと比べて、調整手法の粗雑化、甕にみられる長胴化の兆し、小型精製三種の崩壊等、顕著な変化が認められる。また豊中市北条遺跡河川状遺構では当段階の上器と共に陶質上器ないしは初期須恵器と目されるものも出土しており、布留式土器と須恵器との関係を考える上でも、布留式上器そのものを考える上でもこの段階は非常に重要な位置を占め、断片的ではあるが、ここにその一資料が得られたと言える。

V. まとめ

今回、調査面積が約150m²弱という限られた狭い範囲であったが、弥生時代と考えられる土塙や、古墳時代中期の住居址、後期の掘立柱建物跡等を検出できることは大きな成果である。特に古墳時代中期の住居址の検出は、谷を隔てて東側に位置する小石塚・大石塚古墳を初めとする桜塚古墳群と同時期にあたること、また周辺に広がる可能性が高いことなどから、古墳と集落を考えていく上で重要な遺跡となろう。

1号住居址と3号住居址では周壁に板材を用いたと思われる痕跡があることから、おそらく板壁が使用されていた可能性が高いと推測される。

出土土器については、布留式上器の範疇でも小若江北式より新しく、須恵器出現時の上器よりは古い様相を呈している。布留式土器が大きく2区分されることを述べたことがある。それに従うならば、後半の布留3式の古段階に位置づけることができるであろう。

註1)前田照男「布留式に関する一試考」『ヒストリア』第101号 1983年 布留式土器の編年はこの論文を参考した。

(2)1977年~78年、豊中市教育委員会調査。目下、整理作業中。

(3)八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』1981年。

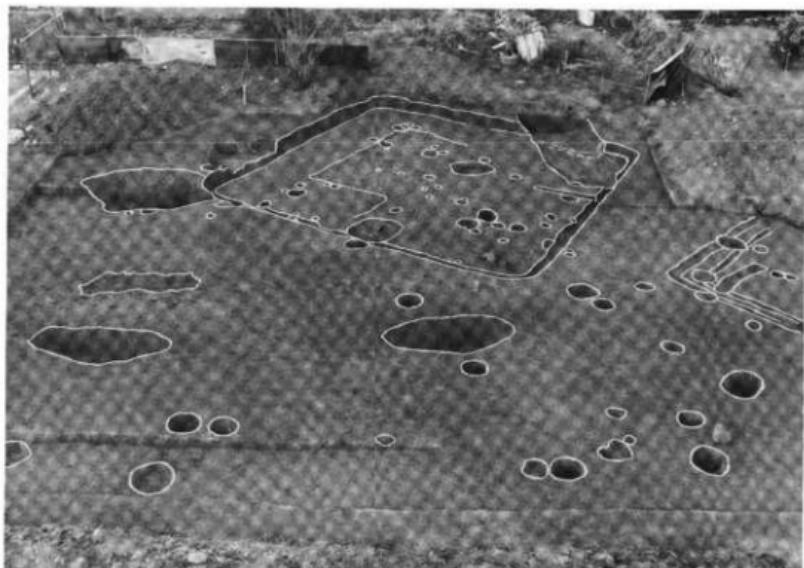
(4)1979年豊中市教育委員会調査。目下、整理作業中。



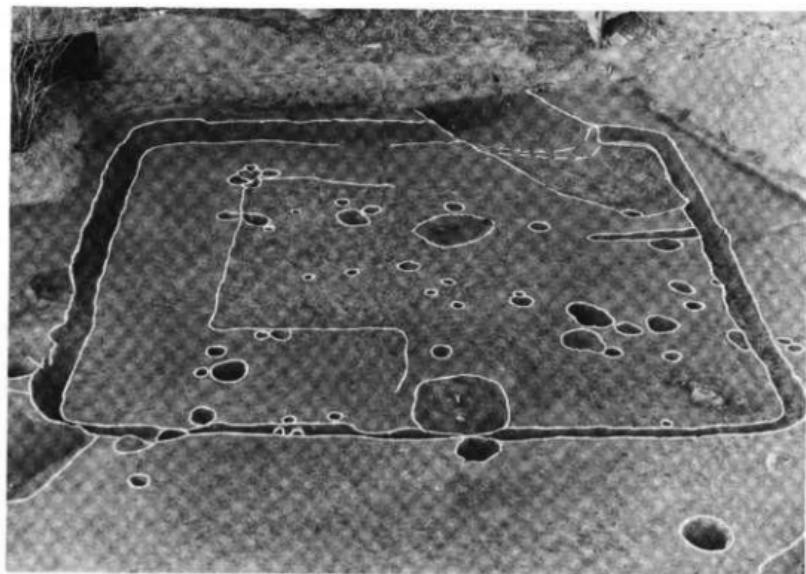
(1) 調査前の状況



(2) 遺構検出状況

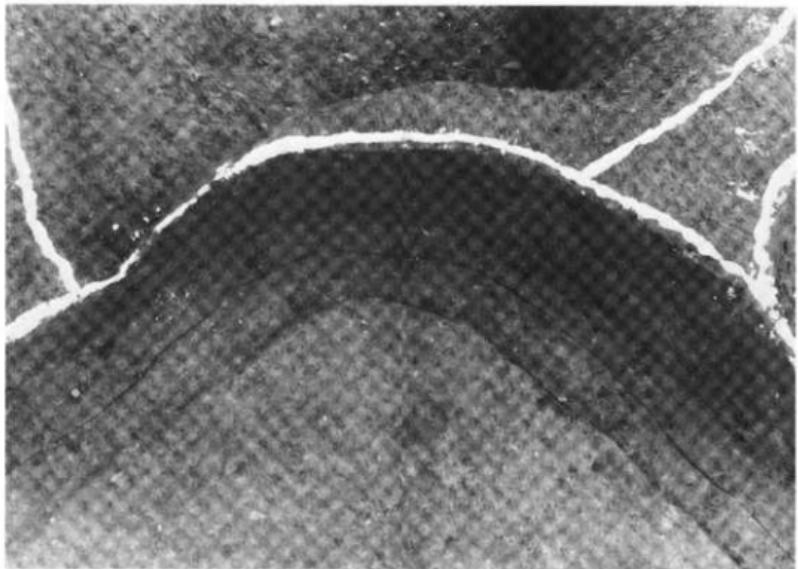


(1) 遺構検出状況（南から）

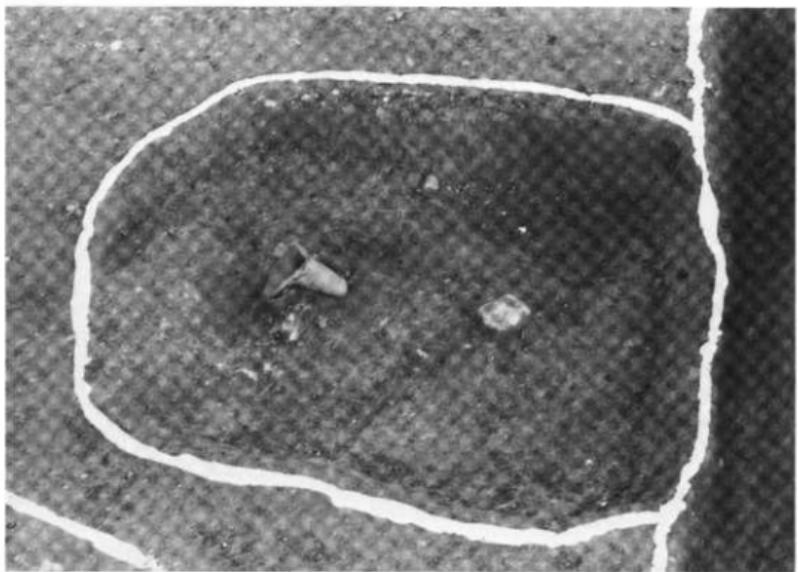


(2) 1号住居址検出状況

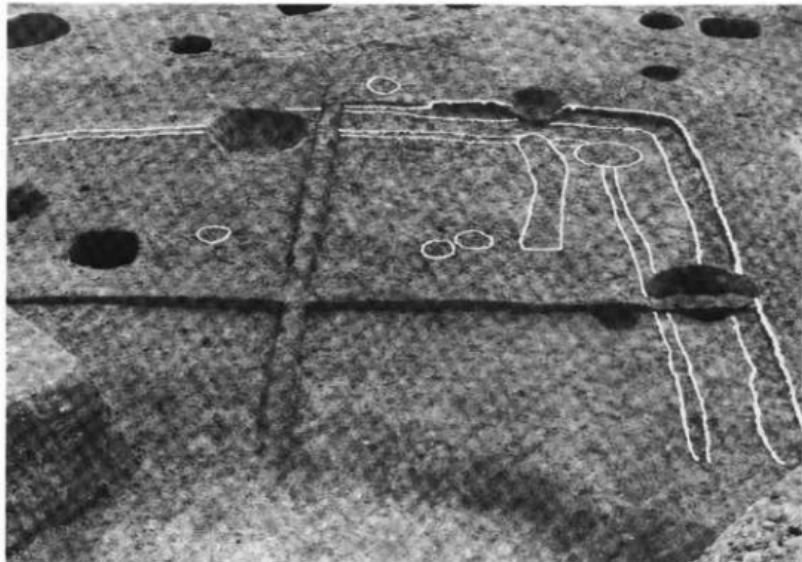
圖版 3
山ノ上遺跡



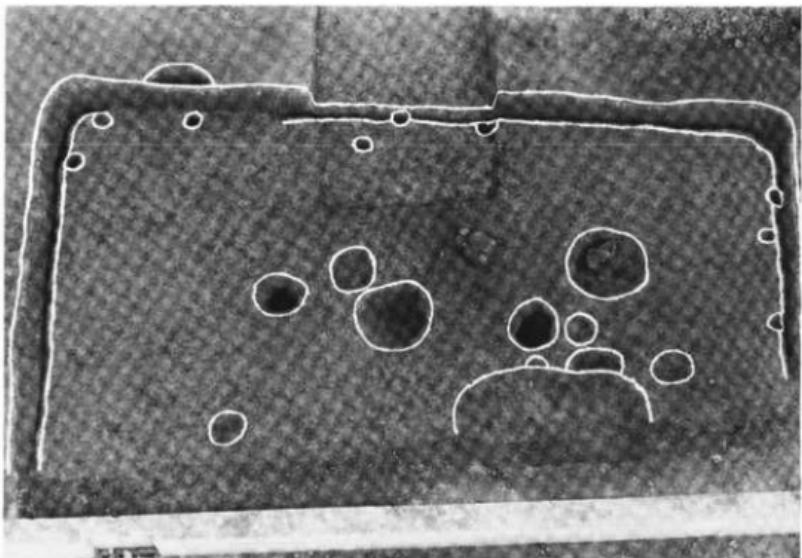
(1) 1号住居址周溝埋土状況



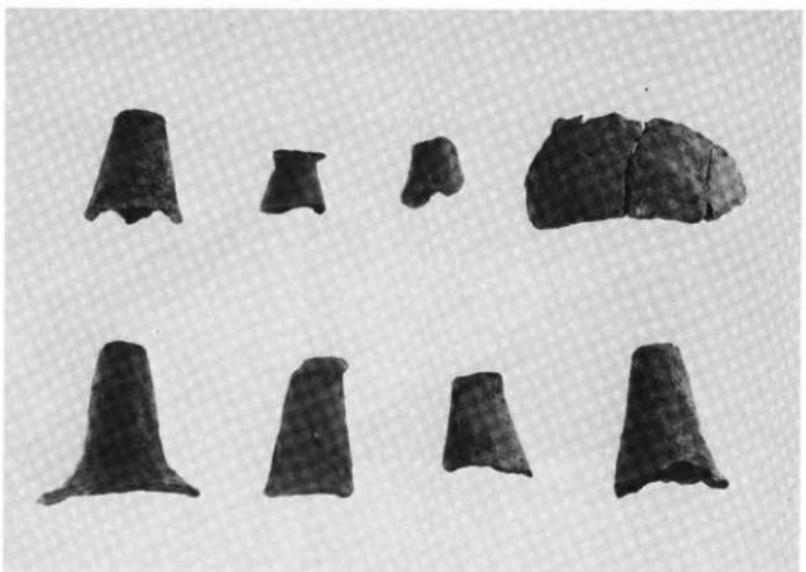
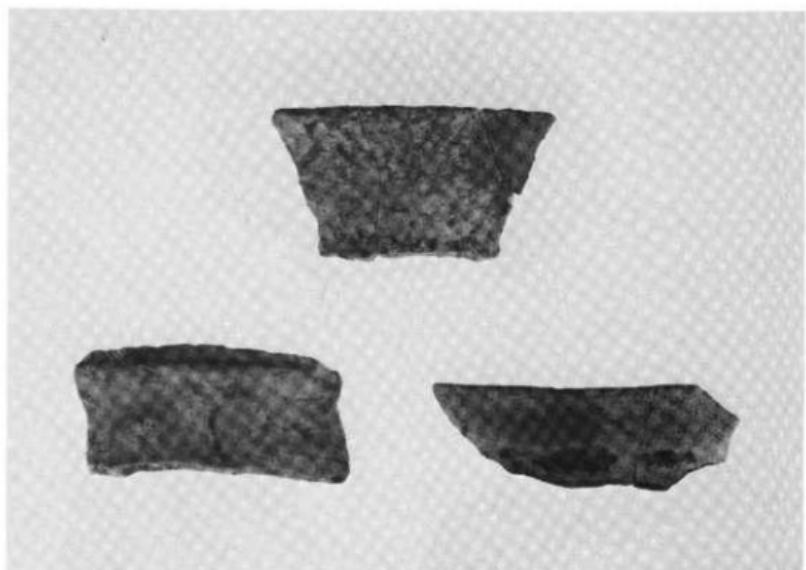
(2) 1号住居址、土塙内遺物出土状態

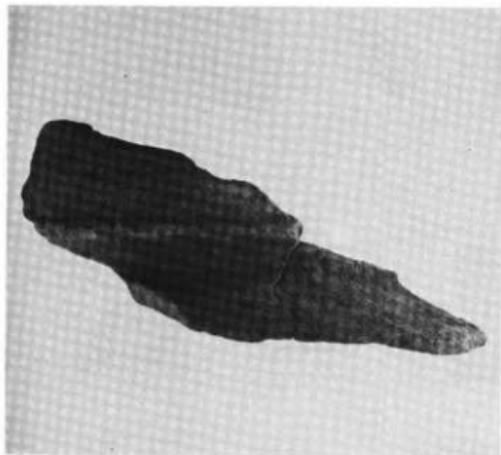
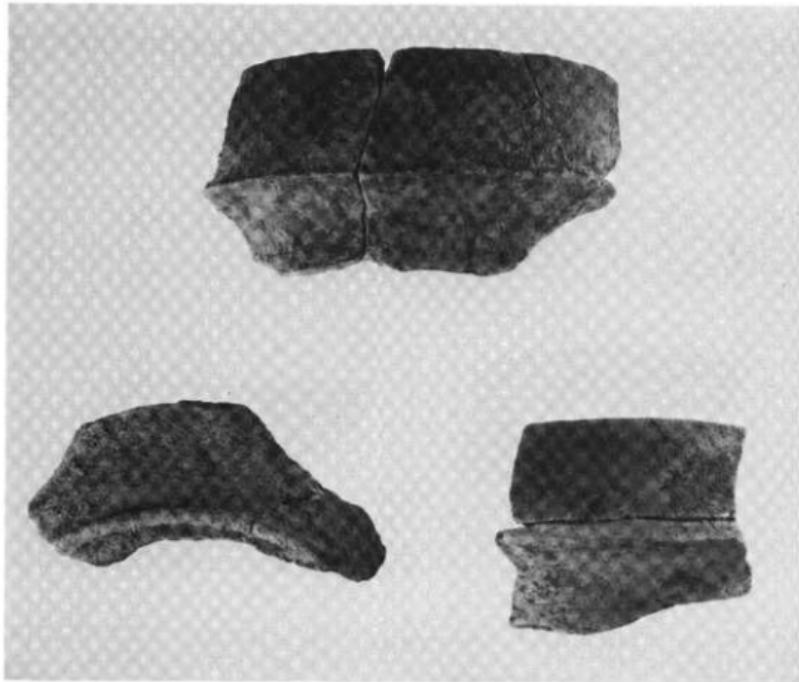


(1) 2号住居址検出状況



(2) 3号住居址検出状況





島田遺跡第3次発掘調査概要報告

例 言

1. 本書は、豊中山庄内采町2丁目29-2番地、他において実施した庄内再開発事業の共同住宅建築工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、昭和59年7月13日から同年7月27日にかけて実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育部社会教育課文化係が実施し、柳本照男が現地を担当した。
4. 本書は、出土遺物を山元建が、その他を柳本が執筆した。編集は柳本が行ない、橋本正幸、山上雅則の協力を得た。
5. 土地所有者、井原富久雄氏には建築確認時のお願いであったが、埋蔵文化財に対する認識を十分示され、快く承諾していただいた事に対し深く感謝いたします。

目 次

I.はじめに	59
II.調査の概要	59
III.出土遺物	60

I. はじめに

調査地点は豊中市庄内柴町2丁目29-2番地他である。共同住宅建設に伴う立会調査の結果、多くの遺物の存在がみられたので、遺構の確認、遺物の広がりなど調べるために行なった試掘調査である。またこの地点も北西部を中心をもつ島出遺跡の範囲内におさまるものであることが確認された。以下調査の概要を述べる。

II. 調査の概要

立会調査の結果、遺物の出土をみた、北東部の角を基点にして、西側と南側に逆L字形にトレンチを設定した。調査に必要な上層部分は機械により削除し、以下人力掘削で行なった。基本層序は6層に大別できる。

遺物を多く含む層は第5層と第6層であるが、その中でも第6層が多く北東部分に集中して出土している。

明確な遺構は確認できなかったが、浅い落ち込み状のものが確認され、その堆積土内に植物遺体とともに遺物片が出土している。その東側の肩部ないし、斜面地にかけて流木とともに弥生時代から奈良時代頃までの遺物が混在して出土している。このようなことから北西方向から南東方向に古くは自然の河川が存在し、それが埋没していく過程の浅くなかった状況であると考えられる。

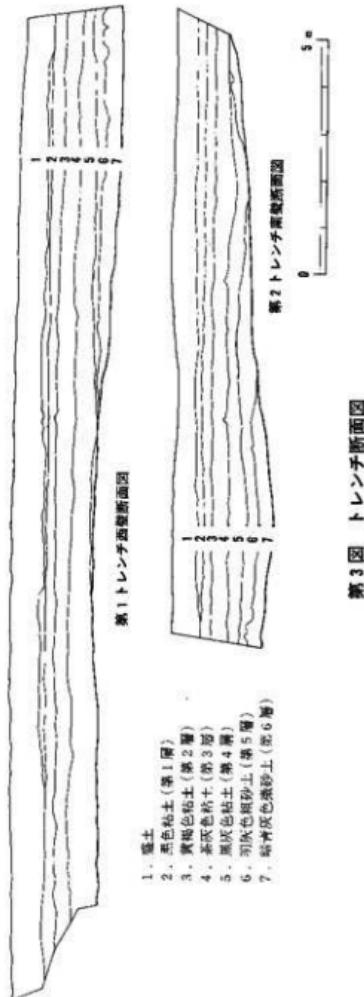


第1図 調査地点位置図

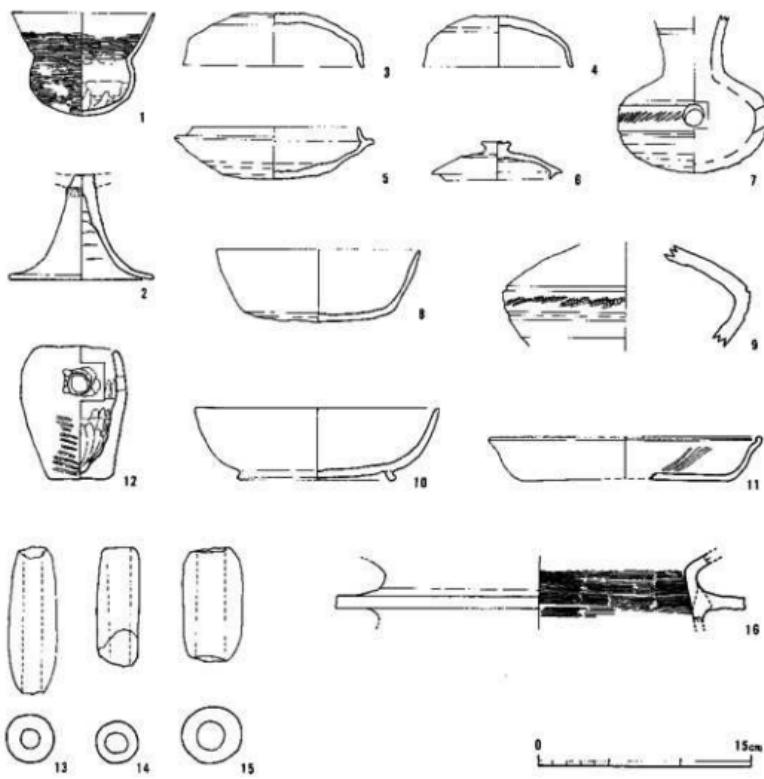
えられる。このことは下層において粗砂層が広範囲に存在することからも推定できる。遺跡は北側に広がっている可能性が高い。

III. 出土遺物

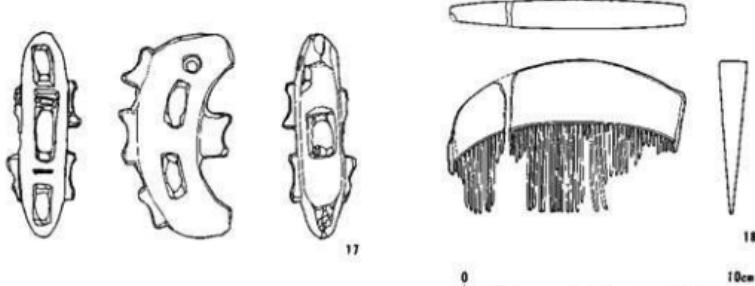
土器（第4図1・2・11～15） 小型丸底甕、高杯、皿、鉢等が出土している。1は第1トレンチ第7層出土の小型丸底甕で淡赤褐色を呈し、口径10cm、高さ7.3cmを計る。外面と口頭部内面を横方向のヘラミカキで調整した後、口縁部にヨコナデを施す。体部内面には横方向の軽いヘラケズリが認められる。2は第2トレンチ第6層出土の高杯で、淡黄褐色を呈し、裾部径10.4cmを計る。内・外面指ナデの後、裾部に横ナデを施し、内面には接合痕と絞り目が認められる。12は落ち込み東側肩部付近の第6層より出土した鉢で、淡黄褐色を呈し、高さ9.6cmを計る。内外面とも粗雑



第2図 トレンチ配置図



0 15cm



0 10cm

第4図 出土遺物実測図

な指ナデで仕上げられており、外面下半の一部にはタタキが施される。内面には二ヶ所の明瞭な接合痕が認められ、体部上半に組穴を一孔穿つ。11は第2トレンチ第6層出土の皿で淡黄褐色を呈し、口径19.1cm、高さ3.1cmを計る。内面に輻方向の暗文状のヘラミガキを施し、口縁部は肥厚させておわる。13~15は土鍤で、全て落ち込み東側肩部付近の第6層から出土したものである。13は淡黄褐色を呈し、現寸で長さ10.4cm、直径3.4cmを計る。中央部がややふくらみ、両端は欠損する。14は淡黄褐色で筒状を呈し、現寸で長さ8.6cm、直径3.2cmを計るが、一方は大きく破損している。15は黄褐色を呈し、現寸で長さ8.2cm、直径4.2cmを計る。短小な印象を受ける。土鍤はいずれも磨滅が激しく、破損しているものも多いため、使用後廃棄されたものと考えられる。

須恵器（第4図3~10） 盖杯、甌、壺等が見られる。

蓋杯（3~5・8・10） 3は口径12.8cm、高さ3.8cmを計る蓋で、内外面とも灰色を呈する。ヨコナナデ調整後、天井部に回転ヘラケズリを施す。天井部からなだらかに口縁部に継ぎ、口縁端部も丸くおわる。4も蓋で、口径10.8cm、高さ3.6cmを計る。灰白色を呈し、黒く変色する部分がしみ状に残るやや焼成不良の土器であり、ヘラケズリも認められない。天井部から口縁部になだらかに継ぎ、端部は丸くおわる。5は、黒灰色を呈し、口径14.0cm、高さ3.8cmを計る身である。受部は短かく水平に伸び、底部は回転ヘラケズリを施す。8は第1トレンチ第5層から単独で出土した完形の身で、口径14.4cm、高さ5.2cmを計る。底部から直線的に開く体部に継ぎ、口縁端部は丸くおわる。内外面とも灰褐色を呈し、外面の半分程度が黒く変色する生焼けの土器である。底面は回転ヘラケズリを施す。10は拡張区から出土した身で、口径17.2cm、高さ5.2cmを計る。外反気味に短かく外傾する高台の付く底部にやや内傾気味に開く体部が継ぎ、色調は淡灰褐色を呈するが、外面の大半は黒く変色している。底面に回転ヘラケズリを施す。

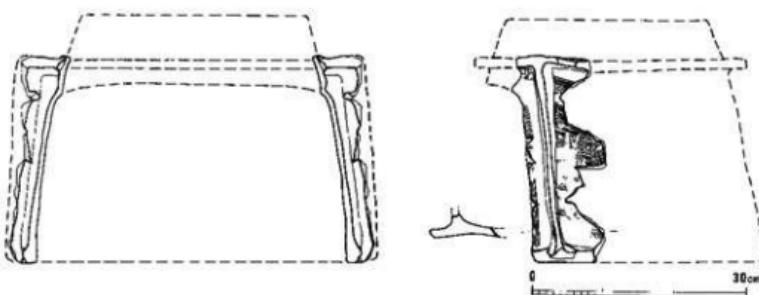
甌 6は落ち込み東側肩部付近の第6層より出土した。直径9.1cm、高さ2.8cmを計り、黒灰色を呈するが、外面は風化して白く変色する。ヨコナナデ後、天井部に回転ヘラケズリを施す。かえりは短かく内傾し、ややシャープな感を呈する。

甌 7は落ち込み東側肩部付近の第6層から出土したものである。体部に2条の沈線を施し、その内側にヘラ描斜線文を巡らした後に一孔を穿つ。また、頸部にも沈線を施す。底部には回転ヘラケズリが認められ、体部外面には自然釉が附着する。

壺 9は第2トレンチ第6層から出土した壺の体部で、直径17.4cmを計り、2条の沈線間に櫛描列点文を施す。胎土に砂粒が目立ち、焼成も不良である。

羽釜 16は第2トレンチ第6層より出土した土師質の羽釜で、鋤部での復元直径は29.0cmを計る。全体にくすぶった淡茶褐色を呈し、鋤部はほぼ水平に伸びた後にややくぼんだ面をなしておわる。内面に細かい刷毛を施す。

甌（第5図） 甌の焚口部右側の鋤部である。現寸で高さ29.4cmを計り、茶褐色を呈するが内面は全体にくすぶる。内外面とも指ナデを施した後に、外面にはハケメも施す。



第5図 出土遺物実測図

子持勾玉 (17) 落ち込み東側肩部付近の第6層から出土した。一側面の突起部を欠損する以外はほぼ完形で、長さ7.2cm、幅4.2cm、厚さ2.6cmを計る。腹部に1つ、両側面に2つ、背部に3つの突起を有し、各突起は端面がえぐられている。暗青灰色の滑石製で、全面に加工痕が残る。

櫛 (18) 落ち込み東側肩部付近の第6層から出土した挽櫛で、二つに折れているが、穂5.5cm、横約8.5cm、櫛部の厚さ1.0cmを計る。

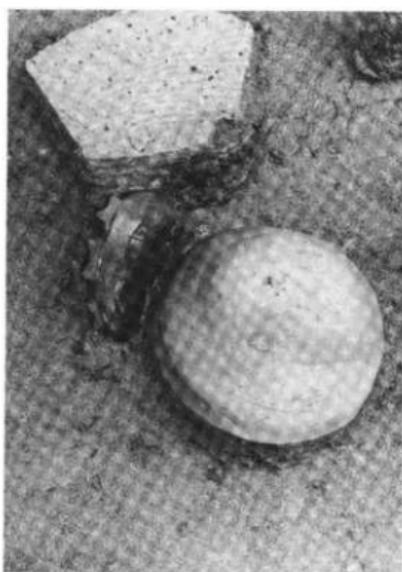
以上、第5・6層を中心に出土した遺物は古墳時代後期(6世紀)と奈良時代(8世紀)に大別することができる。しかし、それらは明確な層序、遺構に伴うものではなく、總じて落込み等に流れ込んだ状態を示している。子持勾玉17、櫛18は各々古墳時代後期、奈良時代に属すると考えられ、鱗巻12は時期を明確にし難い。なお、小型丸底壺1は古墳時代前期に遡ると考えられ、層位的にも第7層から出土している。



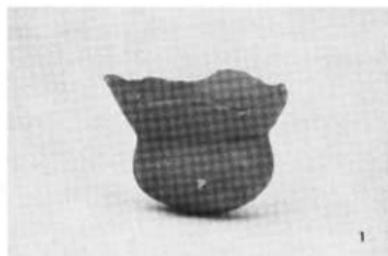
(1) トレンチ配置状況（南から）



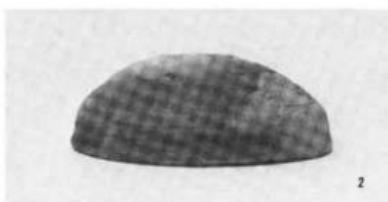
(2) トレンチ配置状況（西から）



(3) 子持勾玉出土状態



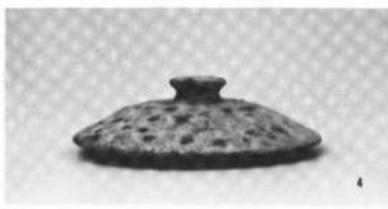
1



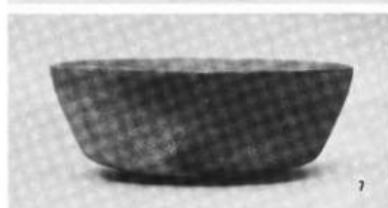
2



3



4



5



6



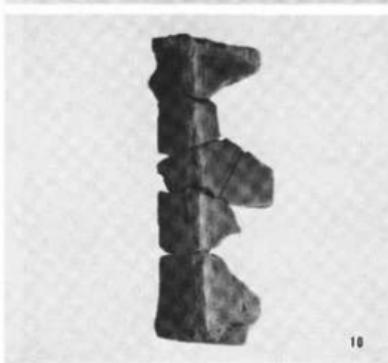
7



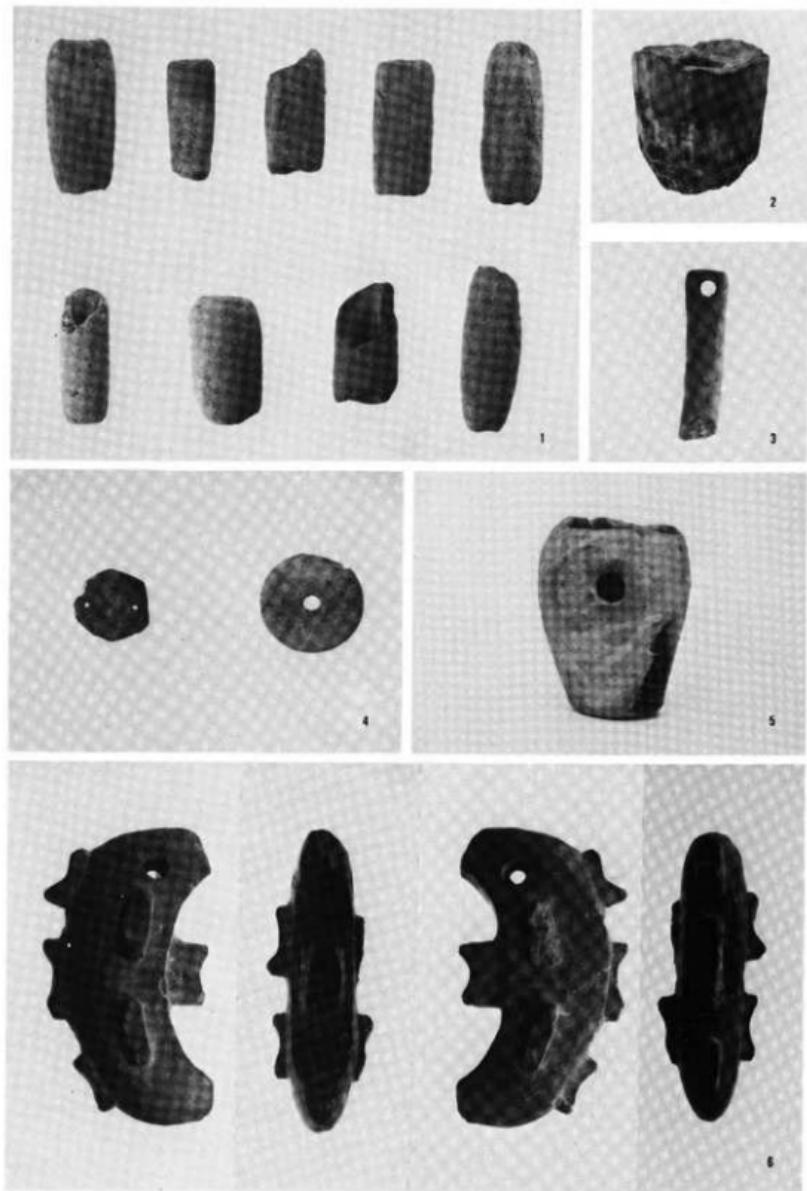
8



9



10



新免遺跡第10次発掘調査概要報告

例　　17

1. 本書は、豊中市玉井町3丁目85-1～3番地において実施した個人住宅建築工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、昭和59年12月12日から同年12月22日にかけて実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育部社会教育課文化係が行ない、柳本照男が現地を担当した。
4. 本書の執筆、編集は柳本が行ない、川上雅則の協力を得た。
5. 土地所有者、接部裕子氏には建築確認時の緊急の事態ではあったが決よく御協力いただいた事に対し感謝いたします。

目　　次

I. はじめに	71
II. 調査の概要	71

I. はじめに

調査地点は豊中市玉井町3丁目85-1~3番地である。建物建築範囲内112m²を対象にまずトレンチ調査から入り、遺構の広がりのある個所を拡張した。以下その概要を述べる。

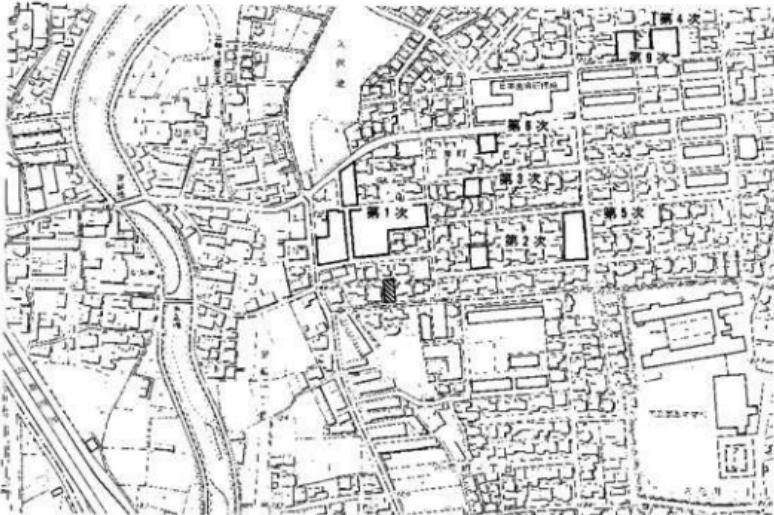
II. 調査の概要

南北方向に、東側と西側にまずトレンチを設定し、それぞれ第1・第2トレンチと呼称した。第1トレンチでは北西方向から南東方向に走る溝と若干のピットを検出したため、西側に3m拡張し、幅5m、長さ8mのグリッドにした。第2トレンチは、幅1.5m、長さ8mのもので、遺構は検出できず、すぐに埋め戻した。

基本層序は、2層からなるがすべて搅乱土の盛地層である。したがって、包含層も残存しておらず、かなり削平を受けているものと思われる。地山は黄褐色の粘土で、洪積層である。古地上に立地しているため、近年の住宅工事などにより地山面もかなり損崩を受けている。

検出した遺構はすべて東側に集中し、溝と掘立柱の柱穴跡を検出した。溝、SD-1が最も新しく、溝、SD-2を切っている。溝と掘立柱の柱穴跡の関係は柱穴跡の方が古い。

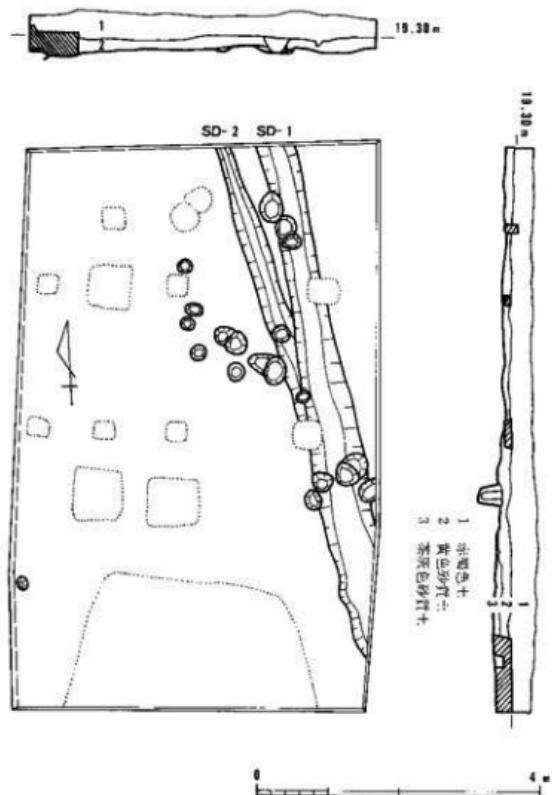
SD-1は幅約0.5m、南側で約0.7mと幅を増し、底も5cmほど低い。深さは約15cmほどで



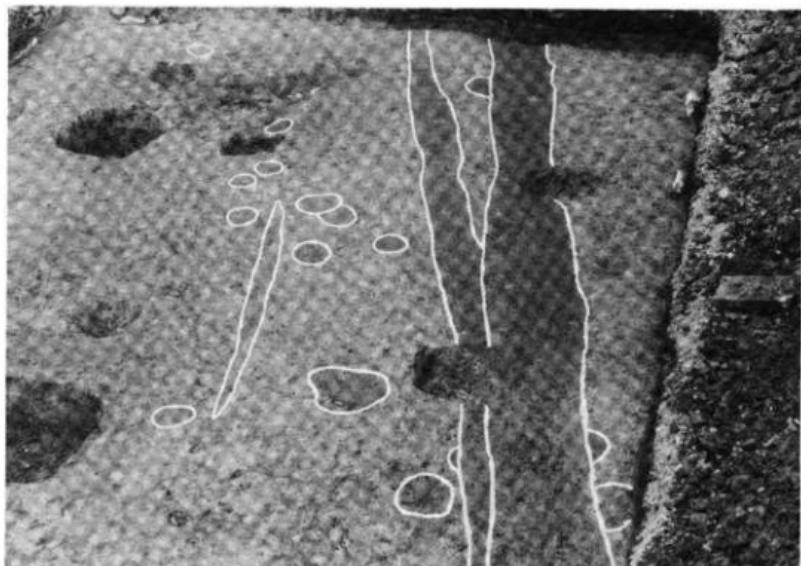
第1図 調査地点位置図

ある。溝内埋土は暗茶褐色の砂質土である。出土遺物は須恵器で高台付の杯身の破片と土師器の破片がある。SD-2は北側幅0.2m、SD-1に切られている部分で幅約0.4mと幅を増し、底も約5cmほど低い。深さは約10cmほどである。出土遺物は須恵器片、土師器片が若干出土している。

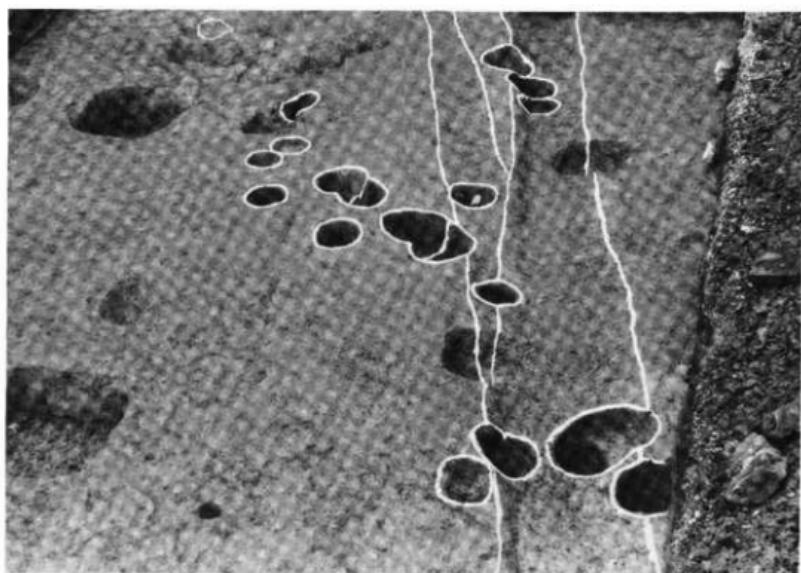
掘立柱建物跡と考えられる柱穴は北西から南東方向のラインで多く検出している。柱穴埋土と深さから最低2時期あるものと推定される。S P-3 埋土上層でサヌカイトの剥片が出土していることなどから、弥生時代と占墳時代の時期と推測される。最も新しいS D-1 は遺物が細片であるため明確にし難く、歴史時代のものと大差無く捉えておく。建物は北東方向に延びるものと推定される。



第2図 第1グリット平面図・断面図



(1) 遺構検出状況



(2) 遺構検出状況（完掘後）

螢池北遺跡第3次発掘調査概要報告

例　　言

1. 本書は、豊中市堂池北町1丁目133-1番地において実施した個人住宅建替工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、昭和59年10月23日から同年10月27日にかけて実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育部社会教育課文化係が行ない、柳本照男が現地を担当した。
4. 本章の執筆、編集は柳本が行ない、山上雅則の協力を得た。

目　　次

I. はじめに	77
II. 調査の概要	77

I. はじめに

調査地点は豊中市堂池北町1丁目133-1番地である。昨年度調査を実施した第2次調査地点と北東部の角で接している。建物建築範囲70m²を対象にトレンチ調査を実施した。以下その概要を述べる。

II. 調査の概要

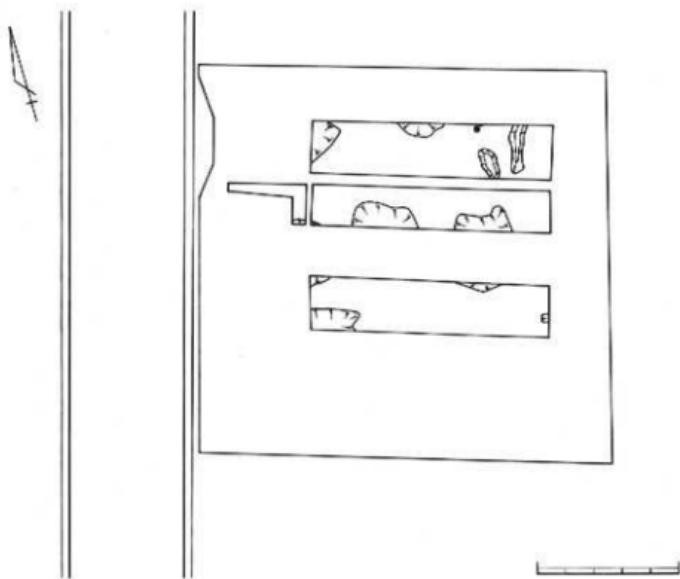
トレンチは、東西方向に3本設定した。幅2m、長さ8.5mのもの2本、幅1.5m、長さ8.5mのもの1本である。中央の第3トレンチと呼称するものの西側に逆L字形に幅の狭いトレンチを補足した。

基本層序は2層からなる。第1層は旧表土で、耕作土である。第2層は茶褐色砂質土の包含層であるが、南側と東側で削平され、残存しておらず、北西部の若干低くなっている部分のみ、残存していた。しかし純粹な堆積土ではなく、弥生時代の遺物から中世遺物までも含んだ包含層である。

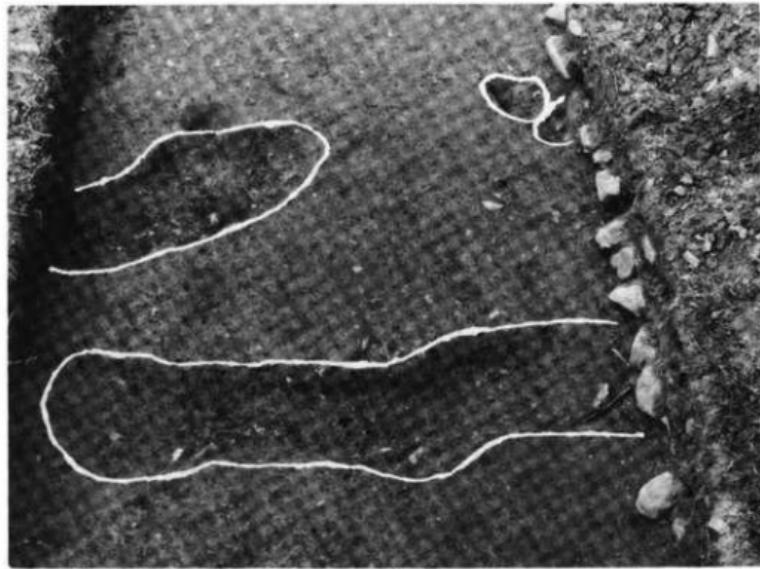
検出した遺構は第2トレンチの東側のみで、溝状遺構、土塙、柱穴などが若干出土している。いずれも遺構は浅く、残存状態は非常に悪いものである。これらの遺構の時期は、包含層も残存しておらず、また遺構内からの出土遺物もないことながら、明確にし難いものである。



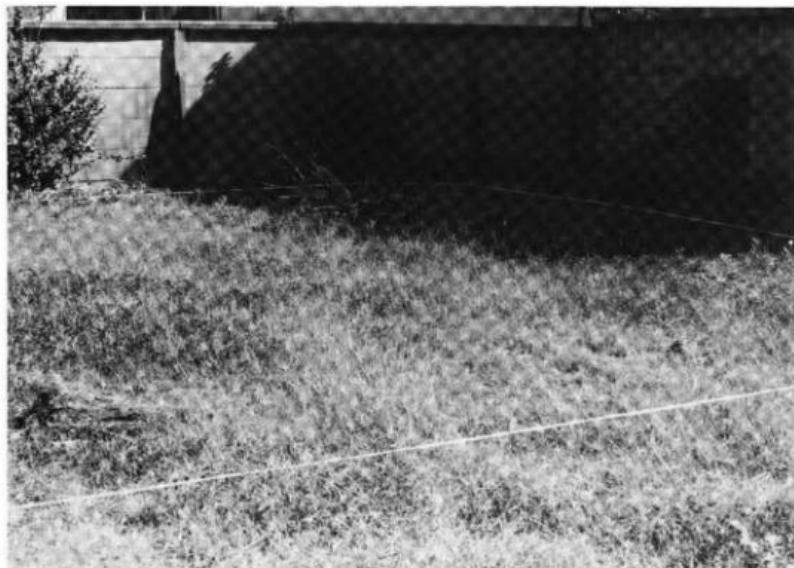
第1図 調査地点位置図



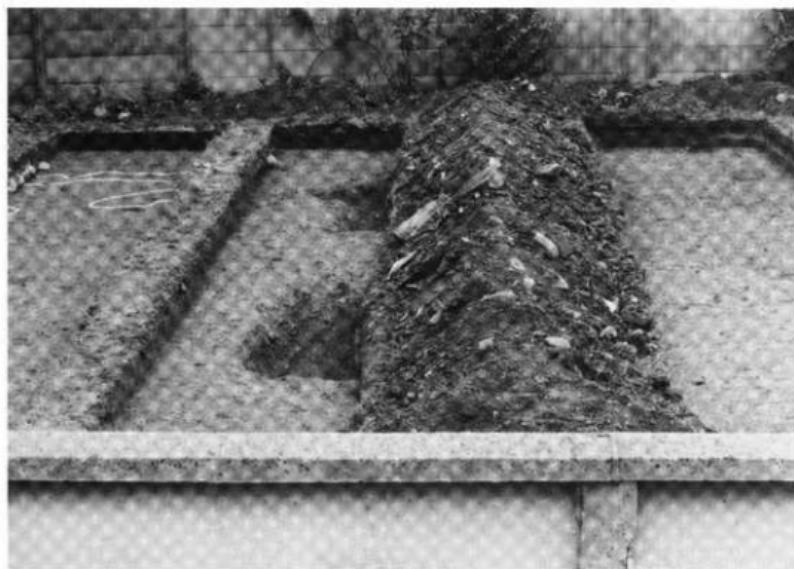
第2図 トレンチ配置図



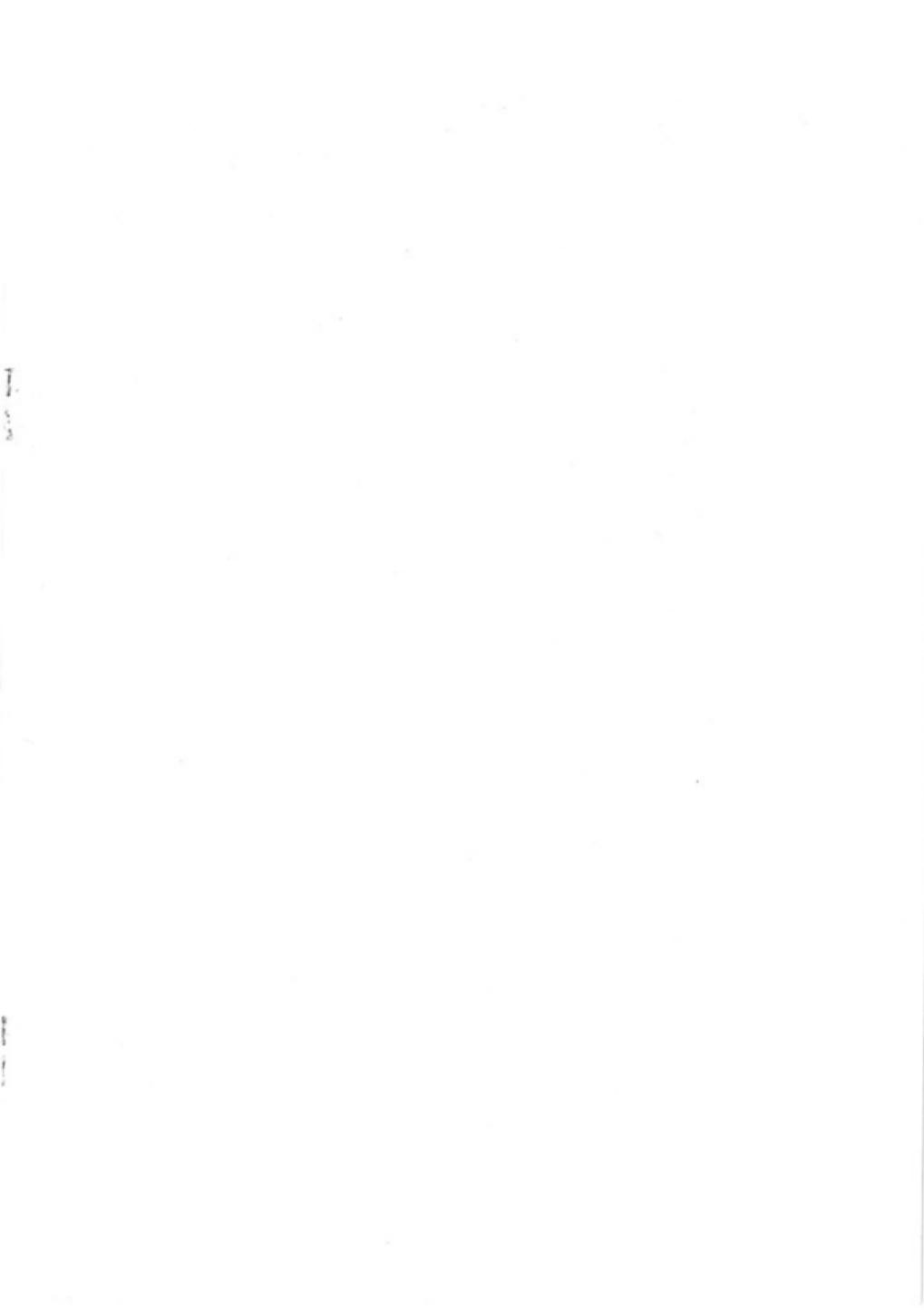
第3図 遺構検出状況



(1) 調査前の状況



(2) 調査後の状況



豊中市文化財調査報告第14集

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1985年3月

発行 豊中市教育委員会

豊中市中桜塚3丁目1-1

編集 社会教育課文化係

印刷 やまかつ株式会社